

# 二日市イシバチ遺跡 4

2015

石川県野々市市教育委員会

ふつ か いち  
二日市イシバチ遺跡 4

2015

石川県野々市市教育委員会





第2、3次調査区全景（上空から）



第4次調査区全景（南西から）



第7次調査区全景（南から）



SI1（上空から）

## 例 言

- 1 本書は、二日市イシバチ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県野々市市二日市町地内である。
- 3 調査原因は、野々市市北西部土地区画整理事業にともなうものである。
- 4 調査は、野々市市北西部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、野々市市北西部土地区画整理組合と野々市市が負担した。
- 6 現地調査の年度・期間・面積・担当者は以下のとおりである。

### 平成 18 年度 第 2 次

期 間 平成 18 年 10 月 12 日～平成 18 年 12 月 26 日  
面 積 1,562㎡  
担当者 横山貴広 野々市市教育委員会文化振興課職員

### 平成 18 年度 第 3 次

期 間 平成 18 年 10 月 12 日～平成 18 年 12 月 26 日  
面 積 760㎡  
担当者 横山貴広

### 平成 19 年度 第 4 次

期 間 平成 19 年 9 月 27 日～平成 19 年 10 月 24 日  
面 積 906㎡  
担当者 横山貴広

### 平成 18 年度 第 7 次

期 間 平成 22 年 4 月 16 日～平成 22 年 12 月 28 日  
面 積 2,853㎡  
担当者 田村昌宏 野々市市教育委員会文化振興課職員

- 7 出土品整理は平成 25・26 年度に野々市市教育委員会が実施した。
- 8 報告書の刊行は平成 26 年度に野々市市教育委員会文化振興課が実施した。担当及び執筆・編集は田村昌宏（野々市市教育委員会文化振興課職員）、編集補助、遺物写真撮影・レイアウトは菊地由里子（野々市市教育委員会臨時職員）が行った。
- 9 本書についての凡例は以下のとおりである。
  - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
  - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
  - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
  - (5) 土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人 日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。
  - (6) 遺構名称の略号は以下のとおりである。  
竪穴建物：S I 掘立柱建物：S B 土坑：S K 性格不明遺構：S X 溝：S D  
柵列：S A 穴：P
- 11 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

## 目 次

第1章	調査の経過	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 発掘作業の経過	1
	第3節 整理作業の経過	2
第2章	遺跡の位置と環境	4
	第1節 地理的環境	4
	第2節 歴史的環境	4
第3章	調査の方法と成果	8
	第1節 調査の方法	8
	第2節 層序	8
	第3節 遺構	8
	第4節 遺物	31
第4章	総括	40
観察表		41
写真図版		

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

本書収録の二日市イシバチ遺跡が所在する野々市市北西部地域は、整然とした水田が広がる農業振興地域であった。しかし、近年における周辺地域の都市化に伴い、本地域も住生活環境の変化が必要となり宅地化の促進が図られることになった。そこで、平成11年に野々市町北西部土地区画整理事業が施行されることが決定した。

北西部土地区画整理施行区域65.4ha内には、埋蔵文化財の存在する可能性があり、詳細な確認調査を行う必要が生じた。そこで、平成11年8月25日付で野々市町産業建設部長から野々市町教育委員会教育長宛に土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財の分布調査についての依頼が出され、同年8月31日付けで同区域での分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、北西部土地区画整理施行区域内に試掘坑352箇所を設定し、宅地化など掘削作業できない箇所を除いた337箇所を、同年9月27日～10月19日にかけて試掘調査を実施した。その結果、以前より存在が確認されていた二日市イシバチ遺跡の南側の範囲が確定したほか、新たに、三日市ヒガシタンボ遺跡、三日市A遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡を発見した。

この結果から、野々市町北西部土地区画整理組合、野々市町都市計画課、野々市町教育委員会と協議を重ね、埋蔵文化財包蔵地のうち、道路等恒久化する工事箇所と、民有地内で十分な遺跡の保護層が確保できない箇所については、発掘調査を行うことで合意した。平成12年4月13日付けで、野々市町と野々市町北西部土地区画整理組合との間で野々市町北西部土地区画整理事業地区内埋蔵文化財に関する協定書が交わされた。

二日市イシバチ遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、三日市A遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡に関する文化財保護法第57条の3に基づく届出については、北西部土地区画整理組合から文化庁長官宛に提出されたものを、平成12年3月29日付けで野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会教育長宛に進達した。これを受けて、同年3月30日付けで石川県教育委員会教育長から野々市町教育委員会教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の届出に関する通知がなされた。

以上の手続きを終えて、平成13年度より上記5遺跡の発掘調査が開始された。

### 第2節 発掘作業の経過

#### 第2次（平成18年度調査）

第2次発掘調査は、土地区画整理地区内の区画道路工事に伴う箇所の調査である。平成18年9月25日、野々市町北西部土地区画整理組合（当時以下、北西部組合と呼称する。）から野々市町（当時）に当該地域における発掘調査の依頼があった。9月27日、野々市町は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。現地調査は10月12日より開始し、12月26日に完了した。

#### 第3次（平成18年度調査）

第3次発掘調査は、土地区画整理地区内を縦断する馬場川河川改修工事に係る仮設用水設置に伴う箇所の調査である。

平成18年9月25日、北西部組合から野々市町に当該地域における発掘調査の依頼があった。10月6日、野々市町は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。

現地調査は第2次調査と併行して実施することとなり、10月12日より開始し12月26日に完了した。

#### 第4次（平成19年度調査）

第4次発掘調査は、土地区画整理地区内の区画道路工事に伴う箇所の調査である。

平成19年9月25日、北西部組合から野々市町に当該地域における発掘調査の依頼があった。9月27日、野々市町は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。現地調査は9月27日より開始し10月24日に完了した。



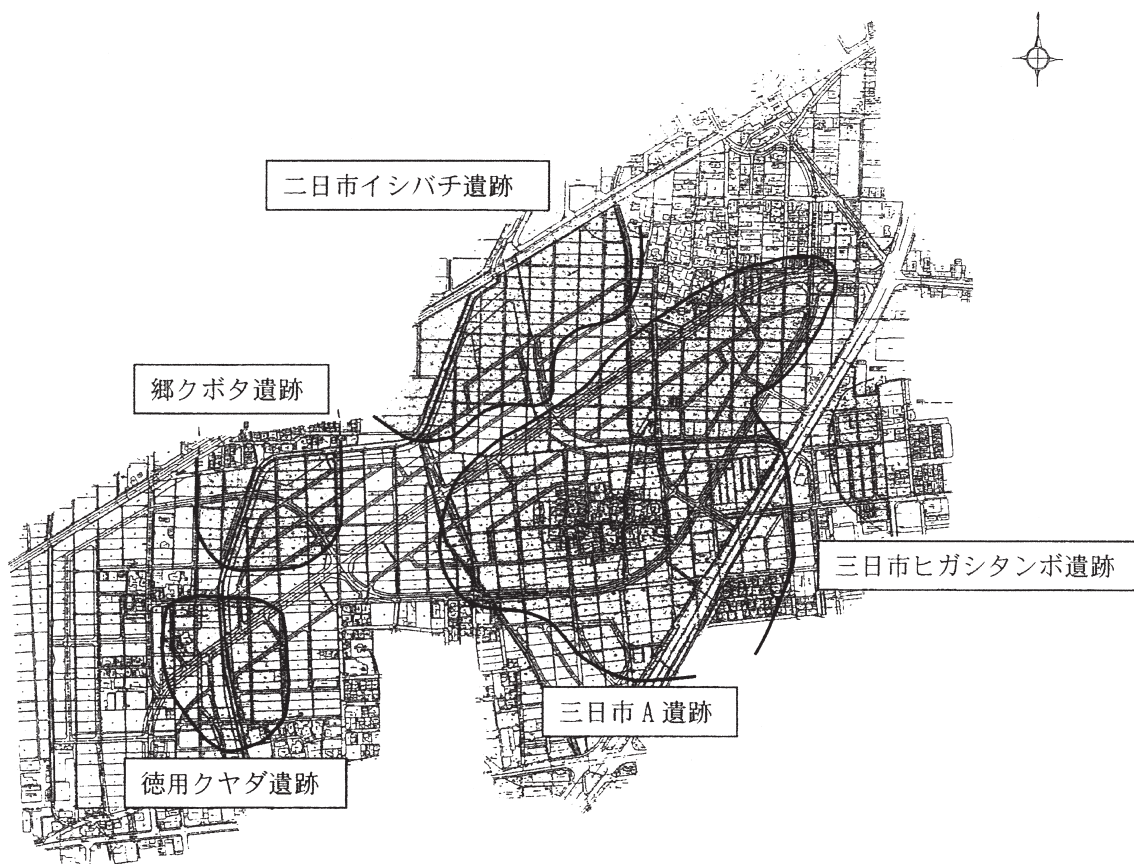
### 第7次（平成22年度調査）

第7次発掘調査は、土地区画整理地区内の民有地内で十分な遺跡の保護層が確保できない箇所の調査である。平成22年4月1日、北西部組合から野々市町に当該地域における発掘調査の依頼があった。同月同日、野々市町は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。野々市町教育委員会は、同年4月14日に文化財保護法第99条1項に基づく発掘調査報告を石川県教育委員会に提出して、本格的な調査に取り掛かった。

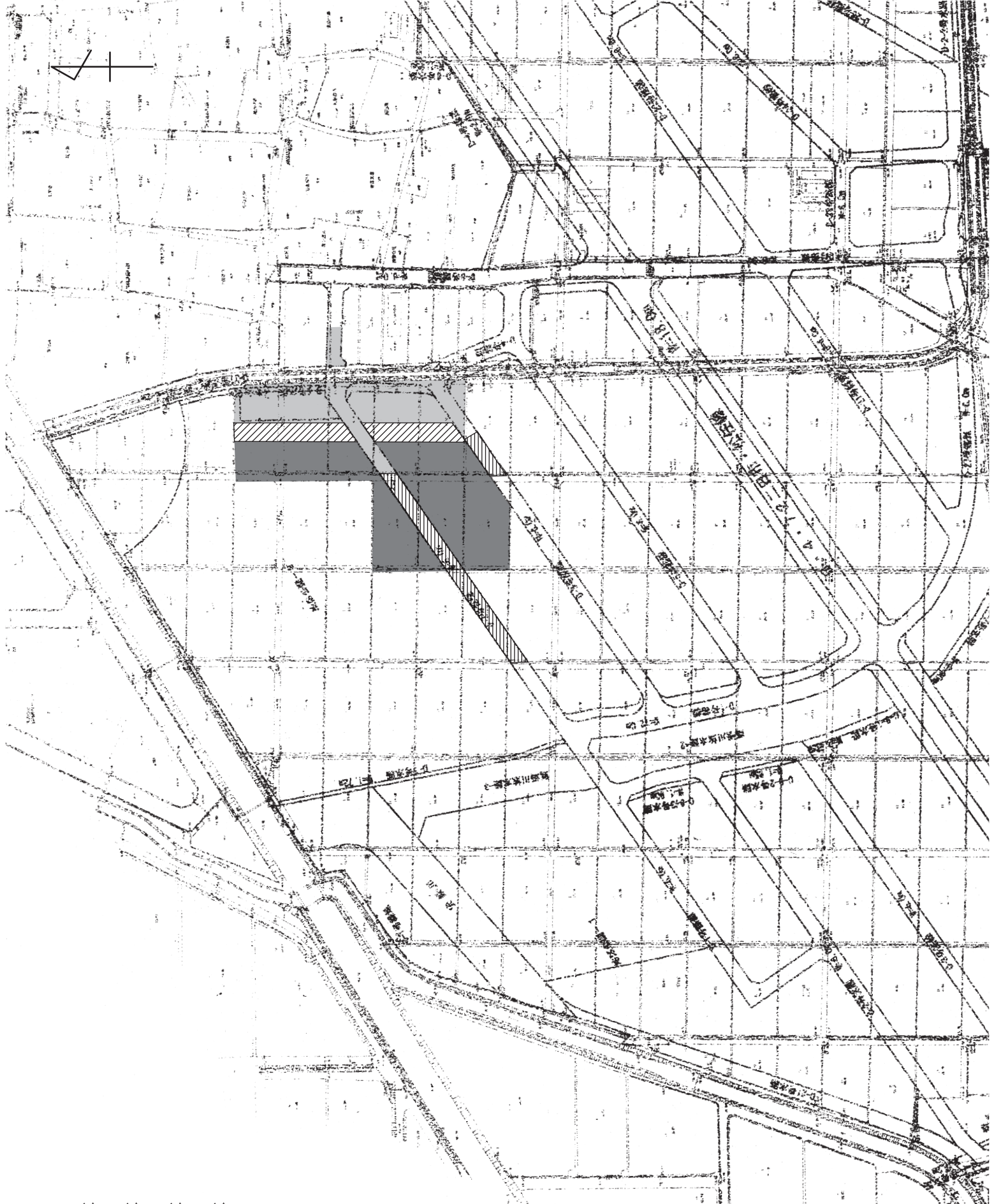
発掘調査は4月16日より調査区の縄張りから始まった。4月19日から大型掘削機による表土除去作業を開始し、表土除去の後、5月10日から発掘調査作業員の人力による遺構検出・掘削を行った。この作業と並行して、個別遺構等の記録・写真撮影を実施し、遺構完掘後は清掃作業を行った後、ラジコンヘリコプターによる空中写真を測量して、同年12月28日に現地調査を完了した。

### 第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成23年度に出土遺物の洗浄を実施したが、本格的には平成26年度からである。平成26年4月1日～5月30日までの間、遺物の出土した地点の記名、分類作業、同一個体の接合をした。5月1日～平成27年1月9日までの間、一部の遺物を選別しての実測作業、12月1日～2月27日にかけて実測した遺構と遺物の製図を行った。平成27年2月9日～2月13日は実測した遺物の写真撮影、同年1月13日からは報告書の執筆を開始し、編集作業を経て平成27年3月27日に発掘調査報告書を刊行した。



第1図 北西部土地区画整理事業地区遺跡位置図



- 2次
- 3次
- 4次
- 7次



第2図 調査区位置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の大きさは南北約 6.7 km、東西 4.5 km で、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇央部と扇端部の狭間に位置する。本市で最も高い標高地は 50 m、最も低い地点は 10 m で、なだらかな緩斜面となる地勢をみせている。

現在の野々市市は平坦な地形が広がっているが、従前は手取川から派生する多くの小河川によって形成された微高地と微低地が混在する地形であった。野々市で人々の生活が認められるのは縄文時代後期前半からで、集落の拠点には標高の高い微高地であった。この時代は扇状地の大部分が未開の原野で、ススキや低木が生い茂る荒地であったようである。その後、稲作の伝わる弥生時代から石川平野の中で水田耕作が営まれるようになり、土地の開墾が始まっていった。古代以降、農耕具の発達などにより凸凹の多い土地は次々と開発されていき、未開発地は耕作地として生まれ変わっていった。明治時代以降は、田区改正による耕地整理が各地で急速に広がり、市内全域は起伏のない平坦な地形へと移り変わり、水田区画は碁盤目のように整然となった。このような、大きく広がった田園風景は昭和 30 年代ころまで見られた。

しかし、昭和 40 年代の高度経済成長期以降は、県庁所在地金沢市の隣接地という地理的条件から、住宅地や商業施設の建設などが著しくなり、急速に水田風景は失われていった。特に、北部の御経塚地区や南部の三納・栗田・新庄地区は区画整理事業が進み、住宅地として生まれ変わっていった。今回、発掘調査箇所となる市域北西部地区も区画整理事業の一貫として行われており、周辺地は大きな変貌を遂げてきている。また、市内の東部には金沢工業大学、南部には石川県立大学といった教育機関が置かれ、野々市市は、若者が多く集う学園都市としての性格も持ち合わせている。

今回の発掘調査地である二日市イシバチ遺跡は、標高約 14 m で、手取川から派生する小河川によって形成された微高地上に立地する。ただし、市域上流部と比較して、大きな川原石の堆積は少なく、微低地との高低差も大差ないことから、当時の生活拠点の場としては、適した地であったと思われる。



第3図 野々市市位置図

### 第2節 歴史的環境

二日市イシバチ遺跡周辺に点在する遺跡を、時代別に概観する。

#### 縄文時代

本遺跡より北東方約 1 km 離れたところには国指定史跡となっている 6 御経塚遺跡が所在する。御経塚遺跡は、縄文時代後期中葉～弥生時代初頭にかけて営まれた地域における拠点集落である。当遺跡で発見された御経塚式土器は縄文時代晩期前半の基準資料となる。御経塚遺跡の近隣には、縄文時代後期後半～晩期後半の 1 チカモリ遺跡や縄文時代後期後半～晩期後半の 2 中屋サワ遺跡といった集落遺跡が点在し、御経塚遺跡の拠点集落を中心に展開した出村的な集落であったようである。これらの遺跡は標高 6～10 m に立地し、扇状地を伏流する地下水の湧水域であった。また、当時の生活に必要な落葉広葉樹と照葉樹が混在する豊かな林野が大きく広がっていた場所でもあったことから、この地帯は当時の人々にとって生活環境に最適な場であったようである。

本遺跡より南東約 2 km のところには、縄文時代晩期の 17 長竹遺跡がある。長竹遺跡は縄文晩期後半の基準資料となる土器が出土した遺跡で、水田稲作農耕が西日本に波及した極めて重要な時期である。なお、12 三日市 A 遺跡及び御経塚遺跡からは、当該時期の稲籾の圧痕のついた土器が出土している。

## 弥生時代

手取川扇状地一帯における弥生時代の遺跡分布を見ると、前期～中期にかけては極めて少なく、後期に数多く存在する。御経塚遺跡（ツカダ地区）、15 乾遺跡からは、柴山出村式と呼ばれる弥生時代前期の土器が確認されているが、この時期は弥生文化の波及が十分ではなく、まだ縄文文化の影響が強く残っていたようである。

弥生時代後期になると、鉄器の普及などを要因とする生産力の向上から人口が増え、それに伴い手取川扇状地一帯にも集落が展開するようになる。本遺跡をはじめ、周辺にある 5 御経塚シンデン遺跡、御経塚遺跡、7 長池ニシタンボ遺跡、10 郷クボタ遺跡、三日市 A 遺跡、13 三日市ヒガシタンボ遺跡、14 徳丸ジョウジャダ遺跡などからは、竪穴建物や掘立柱建物などで構成される集落跡が見つまっている。これは、農耕社会が急速に広がったことから、安定した農耕地の確保が必要となったため、広範にわたってムラが形成していったと考えられる。

## 古墳時代

古墳時代前半については、本遺跡で、弥生時代後期からの流れを汲む集落跡を確認することができるが、扇状地上での集落数は激減し、一旦収束傾向となる。ただし、本遺跡より北方 1 km にある御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群では、弥生集落廃絶後に 15 基の前方後方墳、方墳からなる大古墳群を造立している。また、本遺跡の西端、第 11 次調査区より南西方約 100 m にも、一辺約 18 m の規模を中心とした大小の方墳 7 基を確認しており、各地域を治める首長層の存在を伺い知ることができる。

古墳時代後半になると、本遺跡から南方約 4 km の市上流域の扇状地扇央部で末松古墳や上林古墳など後期古墳が築かれるようになる。これは河川上流域における開発が広がり始めていったことを意味する。

## 古代

7 世紀後半には、手取川扇状地扇央部で本市南端に、県内最古の古代寺院である末松廃寺が建立される。末松廃寺は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この寺院建立以降、市内南部地域を含む手取川扇状地扇央部一帯で耕作地開発が急速に進み、特に 8 世紀後半以降は 18 三納アラムヤ遺跡をはじめとする周辺各地に集落が増大していく。扇状地扇端部には、初期荘園の遺跡である 3 横江荘々家跡、4 上荒屋遺跡が所在する。また、三日市 A 遺跡からは、9 世紀頃に成立した古代の官道である北陸道の跡が見つかり、上記荘園遺跡との関係が指摘されている。

## 中世

11 世紀後半～12 世紀頃から、在地領主層の武士団の形成が図られるようになった。地元武士団である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。ただし、市内において現在のところ中世前半にかけての遺跡はあまり多く確認されていない。中世の遺跡が多く認められるようになるのは、富樫氏が加賀国の守護職に任じられ、野市に守護所を置く 14 世紀頃からである。加賀国守護所富樫館跡は、本市東端に位置し、本遺跡をはじめ、近隣の三日市 A 遺跡や郷クボタ遺跡、中屋サワ遺跡では、溝で囲まれた中に建物などが配置される散居村のような景観が広がる集落が認められる。また、本遺跡南東方 1.5 km にある 16 堀内館跡では、幅 1.5 m、深さ 1 m ほどの大きな堀で囲まれた屋敷地の跡も確認されている。15 世紀以降になると、三日市 A 遺跡、8 長池キタノハシ遺跡、11 徳用クヤダ遺跡では、掘立柱建物、竪穴状遺構などの主要遺構が密集した村落形態を示し、14 世紀頃までみられた散村から集村へと大きく変わる様相となる。

## 近世

現在見ることのできる集落は、近世に成立したと考えられる。御経塚集落内（御経塚遺跡デト地区）や郷町集落（徳用クヤダ遺跡）隣接地での発掘調査でも、近世の遺構・遺物を発見している。また、乾遺跡や、三日市 A 遺跡からは、近世前半の墓地跡を確認している。



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/20000)

第1表 野々市市と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代
1	チカモリ遺跡	集落跡	縄文
2	中屋サワ遺跡	集落跡	縄文～中世
3	横江荘々家跡	荘園	古代
4	上荒屋遺跡	集落跡 荘園跡	縄文～中世
5	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	集落跡 古墳	弥生～中世
6	御経塚遺跡	集落跡	縄文～中世
7	長池ニシタンボ遺跡	集落跡	弥生
8	長池キタノハシ遺跡	集落跡	中世
9	二日市イシバチ遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 中世
10	郷クボタ遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
11	徳用クヤダ遺跡	集落跡	古代 中世
12	三日市 A 遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
13	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
14	徳丸ジョウジャダ遺跡	集落跡	弥生 古代
15	乾遺跡	墓地・集落跡	縄文～近世
16	堀内館跡	館跡	中世
17	長竹遺跡	墓地・散布地	縄文～古墳
18	三納アラミヤ遺跡	集落跡	古代 中世

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

調査は、大型掘削機（重機）による表土の除去作業からはじめた。重機による掘削は、遺構面手前までとした。重機掘削完了後、作業員の人力による掘削作業を開始した。作業は、遺構面の検出を実施した後、遺構の地点を明確にするため、遺構略図を作成し、それと同時に遺構の掘削作業を実施した。主要遺構や遺物が出土したものについては、図化記録をしてから完掘した。調査区内の遺構完掘後は、清掃作業を行ってから、空中写真測量及び個別遺構写真を撮影して調査を終えた。

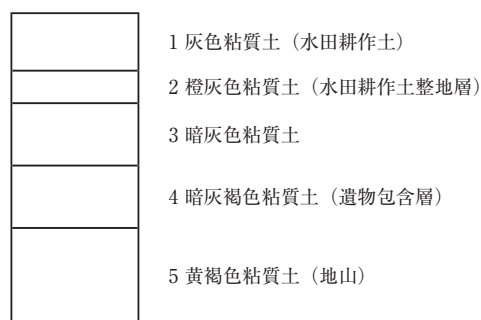
整理作業については、野々市市ふるさと歴史館内にある調査整理室で実施した。作業手順は、出土した遺物を、水で洗浄し乾燥させ、乾燥した遺物に遺跡名や出土した地点などを記名、及び同一個体となる遺物を接着剤で接合した。記名・接合後、一部の遺物は実測し、この遺物実測図や現地で表記した遺構実測図を製図トレースした。

これらの作業完了後、遺物の写真を撮影し、併行して調査担当者が原稿執筆、図面・写真のレイアウト等を行い、報告書を刊行した。

#### 第2節 層序

層序については、第5図の土層断面図を基に説明していく。

1の灰色粘質土は土地区画整理事業以前まで行われていた水田耕作土である。2の橙灰色粘質土は、1水田耕作土の整地層にあたる。3の暗灰色粘質土は、近世から近代までの水田耕作土と考えられる。その下の暗灰褐色粘質土は古代以前の遺物包含層にあたり、中世の遺構面にも相当すると思われる。その下の5黄褐色粘質土は、古代より古い時期の遺構面（地山面）である。



第5図 土層断面模式図

#### 第3節 遺構

本調査で発見された主要な遺構は、竪穴建物、竪穴状遺構、掘立柱建物、土坑、溝、柵列などである。以下は、各遺構の個別の概要である。

##### ① 竪穴建物 竪穴状遺構

###### S I 1（第6・8～10図）

弥生時代後期の竪穴建物である。一度大きな改修が認められ、隅丸方形プランから六角形プランに拡大している。竪穴の東側は調査区外へと延びており、全体の様相は明らかでない。隅丸方形プランの方位はN 22° E、規模は北東－南西約 5.8 m、北西－南東約 6.2 m、深さ約 20 cm である。竪穴外周には幅 20～30 cm、深さ床面から約 8～13 cm の溝が周る。柱穴はア～エの 4 本柱で、形状は円形と略円形が認められる。穴の規模は直径 25～48 cm、深さ竪穴床面から 22～36 cm を測る。なお、柱穴の中には 2 基の穴が隣接して掘られ痕跡があることから、一度柱の位置をずらして建物を造り直したかもしれない。

隅丸方形プランを拡大改修した六角形プランは一辺 3.5～4 m、規模は南北約 7.8 m、東西 6.4 m 以上、深さ約 15 cm である。竪穴壁際には幅 25～35 cm、深さ床面から約 5 cm の溝が周る。床面上には硬化面を確認できた。柱穴はオ～サの 6 本柱で、形状は楕円形と略円形である。穴の規模は直径 25～52 cm、深さ床面から 24～38 cm を測る。

竪穴中央部にはテラスを有した特殊ピットのシが存在する。規模は南北約 1 m、東西約 96 cm、深さはテラスが約 12 cm、最深部約 44 cm を測る。

また、貼床を外した竪穴の下部には直径 10～50 cm、深さ 10～20 cm のピットを複数確認した。

### S I 2 (第6・11 図)

南北に長い長方形プランをした弥生時代後期の竪穴建物である。方位はN 6° Wである。竪穴の規模は、南北約 4.8 m、東西が約 3.8 m、面積約 18.2 m<sup>2</sup>、深さ約 40 cm で、竪穴壁際には幅 28 ～ 50 cm、深さ床面から約 10 cm の溝が全周する。床は全面に貼床されている。内部には複数のピットが認められるが、柱穴と認識できるものはなかった。また、竪穴内の北側中央部床面直上には人頭大の自然石 2 個を確認した。この石の脇にある穴付近の床面上から 98 の翡翠製勾玉が出土した。

### S I 3 (第6・12 図)

東西に長い長方形プランをした弥生時代後期の竪穴建物である。方位はW 10° Sである。竪穴の規模は、南北約 4.4 m、東西が約 6.0 m、面積約 26.4 m<sup>2</sup>、深さ 10 ～ 20 cm である。竪穴壁際には幅 20 ～ 30 cm、深さ床面から約 5 cm の溝が周る。床は貼床が施されている。柱穴は 2 基 (ア、イ) 認められる。柱穴は略円形で、規模は直径 30 ～ 35 cm、深さは床面から 39 ～ 49 cm を測る。竪穴内中央部から東寄りに見られるピットのウは、特殊ピットと想定される。穴は略円形で、長径約 40 cm、短径約 30 cm、深さ床面から 46 cm で、周囲には長径約 100 cm、短径約 80 cm、深さ約 10 cm のテラスがある。

### S I 4 (第6・12 図)

隅丸方形をした中世の竪穴状遺構で、内部には S B 3 の柱穴 1 基が存在する。竪穴は正方形を呈し、一辺約 1.3 m、深さ約 10 cm を測る。貼床は施されていない。配置関係から、S B 3 とは共存するかもしれない。

## ② 掘立柱建物

### S B 1 (第6・13 図)

中世の総柱式建物である。建物東側は調査区外へと延びるため、規模など詳細はわからない。南北 2 間、東西 2 間以上で、方位はN 3° Eである。柱間の長さは南北が約 3 m、東西が約 3.3 m を測る。柱穴は円形・楕円形をし、直径 30 ～ 65 cm、深さ 34 ～ 61 cm である。

### S B 2 (第6・13 図)

桁行 2 間×梁行 1 間の規模をした弥生時代後期の掘立柱建物である。方位はW 17° Nである。柱間の長さは桁行が 1.7 ～ 1.9 m、梁行約 3.1 m を測る。柱穴は略円形をし、直径 30 ～ 40 cm、深さ 38 ～ 56 cm を測る。

### S B 3 (第6・14 図)

東西が桁行、南北が梁行の東西棟である中世の掘立柱建物である。桁行 3 間、梁行 1 間、方位 N 2° E である。柱間は東西が 1.7 m、2.3 m、2.6 m、南北が 3.5 m を測る。柱穴は略円形・略方形をし、直径 30 ～ 45 cm、深さ 28 ～ 42 cm を測る。

### S B 4 (第6・14 図)

弥生時代後期の掘立柱建物である。建物南側は調査区外へと延びるため、規模など全容はわからない。南北 2 間以上、東西 2 間で、方位はN 16° Eである。柱間の長さは南北が約 1.8 m、東西が約 2.5 m を測る。柱穴は円形・略円形をし、直径 25 ～ 30 cm、深さ 24 ～ 27 cm である。

## ③ 土坑

### S K 1 (第6・15 図)

北西 - 南東が長い歪な楕円形をしている。穴の中央は一段低くなっている。規模は長辺が約 1.9 m、短辺が約 1.0 m、深さは約 25 cm を測る。



S K 2 (第6・15図)

略円形をした土坑で、直径約 95 cm、深さ約 40 cm を測る。遺物は出土していないことから、時期はわからない。土層の堆積状況から、人為的に埋めた可能性がある。

S K 3 (第6・15図)

やや歪ながらも隅丸方形をした土坑である。北半は調査区外へと延びるため、全容は明らかではない。南北長 1.0 m 以上、東西長約 1.2 m、深さ地山面から約 70 cm を測る。

S K 4 (第6・15図)

南北に長い隅丸長方形をした土坑である。南北長約 2.65 m、東西長約 92 cm、深さ 20～27 cm を測る。

S K 5 (第6・16図)

S K 4 の北東隣に位置する。方形のプランをした土坑であるが、北半は調査区外へと延びるため、全容は明らかではない。南北長 30 cm 以上、東西長約 1.0 m、深さ地山面から約 31 cm を測る。

S K 6 (第6・16図)

S K 5 の東方に位置する。東西に長い楕円形近い形状をしている。北端は調査区外へと延びるため、全容は明らかではない。南北長 80 cm 以上、東西長約 1.4 m、深さ地山面から約 24 cm を測る。

S K 7 (第6・16図)

S K 4 の南方に位置する。略円形をした形状で、南側は調査区外へと延びるため、全容は明らかではない。南北長 1.25 m 以上、東西長約 1.65 m、深さ地山面から約 36 cm を測る。

S K 8 (第6・16図)

S B 2 の北東方に位置する。略円形をした形状で、南北長約 1.05 m、東西長約 1.15 m、深さ約 83 cm を測る。

S K 9 (第6・17図)

S B 2 の東方に位置する。略円形をした形状で、東端は後世の攪乱により全容は明らかでない。南北長約 1.11 m、東西長 1.1 m 以上、深さ約 29 cm を測る。

S K 10 (第6・17図)

S B 4 の北方に位置する。南北に長い隅丸長方形をした土坑である。南北長約 3.11 m、東西長約 78 cm、深さ約 34 cm を測る。

④ 不明遺構

S X 1 (第6・17図)

東西に長い不定形な土坑状の遺構である。東端は自然河道が走っており、全容は明らかでない。穴内は不定形なテラスや穴が錯綜している。南北長約 1.4 m、東西長 1.8 m 以上、最大深度約 37 cm を測る。43 の珠洲焼播鉢が出土した。

S X 2 (第6・18図)

S K 3 の南方に位置する。北西－南東方が長い隅丸方形土坑になるかもしれないが、はっきりしたプランを見出すことができなかったため不明遺構とした。S X 3 とは切り合っているようだが、前後関係は不明である。北西－南東長約 3.7 m、北東－南西長約 3.3 m、深さ約 30 cm を測る。穴の中央部からは、複数の拳大から人頭大の自然石が集中して見つかった。集石の範囲は直径約 2.0 m で上層面より確認している。

### S X 3 (第6・18図)

S X 2の東隣に接しており、左記の遺構とは切り合っているようだが、前後関係はわからない。北東-南西を長辺とする楕円形の土坑にも見えるが、はっきりしたプランを見出すことができなかったため不明遺構とした。遺構の南端は調査区外へと延びており、全体の様相はわからない。規模は北東-南西長2.6 m以上、北西-南東長2.3 m以上、深さ約70 cmを測る。

### S X 4 (第6・19図)

不定形な形状をした遺構である。中世の竪穴状遺構になるかもしれないが、平面プランが明確でなかったため、不明遺構とした。南北約3.1 m、東西約2.5 m、深さ約15 cmを測る。南端には溝状遺構が枝分かれして東西に延びている。長さ約2.0 m、幅約50 cm、深さ10 cm前後である。

### S X 5 (第6・18図)

コの字型をした遺構である。遺構中央をS D 17によって切られている。南北長約2.8 m、東西長約2.2 m、深さ約28 cmを測る。

### S X 6 (第6・19図)

不定形な土坑状遺構である。平面プランや掘削の様相から風倒木痕の可能性があったことから、不明遺構とした。規模は北西-南東長が約3.6 m、北東-南西長約1.5 m、最大深度約76 cmを測る。本遺構の南端の上面から11の甕が一括出土した。

## ⑤ 溝

### S D 1 (第7図)

調査区北端を東西に走る溝である。後述するS D 2とは切り合っており、本溝が新しいことがわかっている。東方は調査区外へと延びていくため、全容は不明である。長さ10.6 m、幅25～60 cm、深さ約10 cmである。

### S D 2 (第7図)

調査区北端を東西に走る溝で、前述したS D 1に切られている。溝の東端はS D 1に切られ、西端は調査区外へと延びるため、全容はわからない。長さ24.6 m、幅25～30 cm、深さ10 cm前後を測る。

### S D 3 (第7図)

S D 1・2の南側に位置する東西方向の溝である。東方は調査区外へと延びていく。長さ13.8 m、幅60～200 cm、深さ15～50 cmを測る。S D 2とは同一方位となり、両溝間の幅は約1.2 mを測る。この間は道路状遺構になる可能性があり、両溝は路面に対する側溝になるかもしれない。

### S D 4 (第7図)

南北方向に走る溝である。北方は調査区外へと延び、南端はS D 14と合致して終焉する。長さ58.8 m、幅50～70 cm、深さ20～30 cmを測る。

### S D 5 (第7図)

南北方向に走る溝で、S D 4に切られている。北方は調査区外へと延びる。長さ13.7 m、幅70～120 cm、深さ5 cm前後を測る。

### S D 6 (第7図)

南北方向に走る溝で、自然河道と同方向に走っている。北端はS D 3の際からとなり、南端はS D 11に切られて終焉する。長さ30.0 m、幅22～82 cm、深さ10～15 cmを測る。途中で途切れる箇所がある。

S D 7 (第7図)

東西方向に走る溝で、西端は南北溝 S D 4 から分岐し、東端は南北溝 S D 6 から派生する。長さ 9.5 m、幅 22 ~ 25 cm、深さ 10 cm 前後を測る。

S D 8 (第7図)

東西方向に走る溝である。東端は調査区外へと延びる。溝内はテラスやピットが錯綜している。長さ 14.0 m、幅 80 ~ 100 cm、深さ 15 ~ 52 cm を測る。

S D 9 (第7図)

南北方向に走る溝である。北端は南北溝 S D 4 から分岐し、南方は後世の攪乱にぶつかって終焉する。長さ 61.8 m、幅 40 ~ 100 cm、深さ 15 ~ 52 cm を測る。

S D 10 (第7図)

東西方向に走る溝で、東端は南北溝 S D 9 から分岐し、西方は調査区外へと延びる。長さ 19.0 m、幅 38 ~ 60 cm、深さ 7 ~ 20 cm を測る。

S D 11 (第7図)

東西方向に走る近世溝で、東方は調査区外へと延びる。長さ 25.0 m、幅 162 ~ 300 cm、深さ 20 ~ 90 cm を測る。西から東へと低くなっていく。

S D 12 (第7図)

南北方向に走る溝で、北方は調査区外へと延び、南方は S X 2 手前で終焉する。長さ 4.8 m、幅 60 ~ 100 cm、深さ 33 ~ 63 cm を測る。

S D 13 (第7図)

南北方向に走る溝で、北方は自然河道に向かって落ちていく。長さ 7.0 m、幅 40 ~ 60 cm、深さ 10 ~ 15 cm を測る。

S D 14 (第7図)

南北方向に走る溝で、北端は南北溝 S D 4 から派生し、南端は南北溝 S D 9 にぶつかって終焉する。長さ 13.2 m、幅 60 ~ 120 cm、深さ 28 ~ 37 cm を測る。

S D 15 (第7図)

東西方向に走る溝で、東端は南北溝 S D 9 から分岐し、西方は調査区外へと延びる。長さ 70.0 m、幅 50 ~ 60 cm、深さ 15 ~ 20 cm を測る。

S D 16 (第7図)

北東 - 南西方向に走る溝で、一部後世の攪乱により途切れる箇所がある。長さ 31.0 m、幅 70 ~ 220 cm、深さ 5 ~ 20 cm を測る。

S D 17 (第7図)

南北方向に走る溝で、北方、南方はそれぞれ調査区外へと延びる。長さ 57.0 m、幅 35 ~ 80 cm、深さ 10 ~ 15 cm を測る。

S D 18 (第7図)

南北方向に走る溝で、北端は東西溝 S D 15 から派生し、南方は調査区外へと延びる。長さ 35.0 m、幅 20 ~ 30 cm、深さ 10 cm 前後を測る。

S D 19 (第7図)

東西方向に走る溝で、一部途切れる箇所がある。西端は南北溝 S D 20 から派生し、東方は調査区外へと延びる。長さ 12.2 m、幅 40 ~ 60 cm、深さ 10 ~ 20 cm を測る。

S D 20 (第7図)

南北方向に走る溝で、北方、南方はそれぞれ調査区外へと延びる。長さ 12.4 m、幅 40 ~ 60 cm、深さ 10cm 前後を測る。

S D 21 (第7図)

東西方向に走る溝で、西方は調査区外へと延び、東方は南北溝 S D 20 から派生する。長さ 4.5 m、幅 40 cm 前後、深さ 20 ~ 40 cm を測る。

S D 22 (第7図)

東西方向に走る溝で、西方、東方ともに調査区外へと延びる。長さ 4.3 m、幅 40 ~ 55 cm、深さ 15 ~ 20 cm を測る。

⑥ 柵列

S A 1 (第7図)

南北方向に走る柵列である。直径 25 ~ 40 cm、深さ 15 ~ 30 cm の略円形したピット列で構成され、長さ 30.8 m を測る。

S A 2 (第7図)

南北方向に走る柵列である。直径 20 ~ 45 cm、深さ 5 ~ 20 cm の略円形したピット列で構成され、長さ 18.0 m を測る。穴の覆土は灰色粘質土であることから、近世以降の遺構と考えられる。

S A 3 (第7図)

南北方向に走る柵列である。直径 18 ~ 50 cm、深さ 5 ~ 20 cm の略円形したピット列で構成され、長さ 16.8 m を測る。S A 2 とは同一方向かつ穴の覆土も同色であることから同時併存したと考えられる。両柵列の間は約 1 m を測り、道路状遺構であった可能性がある。

S A 4 (第7図)

東西方向に走る柵列である。直径 20 ~ 60 cm、深さ 5 ~ 20 cm の楕円形・略円形したピット列で構成される。西方は調査区外へと延び、東方は S I 1 によって様相は不明である。長さ 8.0 m を測る。

S A 5 (第7図)

南北方向に走る柵列である。直径 20 ~ 60 cm、深さ 10 cm 前後の略円形したピット列で構成され、長さ 9.4 m を測る。穴の覆土は灰色粘質土であることから、近世以降の遺構と考えられる。

S A 6 (第7図)

東西方向に走る柵列である。直径 20 ~ 40 cm、深さ 10 ~ 15 cm の楕円形・略円形したピット列で構成される。長さ 9.0 m を測る。

S A 7 (第7図)

東西方向に走る柵列である。直径 20 cm 前後、深さ 10 ~ 15 cm の略円形したピット群と、長さ 2.0 m、幅約 20 cm、深さ 5 cm 前後の溝状遺構で構成される。東端は南北溝 S D 17 から派生する。長さ 10.8 m を測る。

#### S A 8 (第7図)

東西方向に走る柵列である。直径 20 ～ 60 cm、深さ 15 ～ 45 cm の楕円形・略円形・不定形したピット列で構成される。東端は南北溝 S D 17 から派生する。長さ 14.6 m を測る。

#### S A 9 (第7図)

東西方向に走る柵列である。直径 20 ～ 70 cm、深さ 8 ～ 15 cm の楕円形・略円形したピット列で構成される。長さ 11.0 m を測る。

#### S A 10 (第7図)

東西方向に走る柵列である。直径 20 ～ 50cm、深さ 10cm の略円形したピット群と、長さ 1.8 m、幅約 40 cm、深さ約 10 cm の溝状遺構で構成される。東方は調査区外へと延びる。長さ 6.0 m を測る。

#### ⑦ 自然河道 (第6、7図)

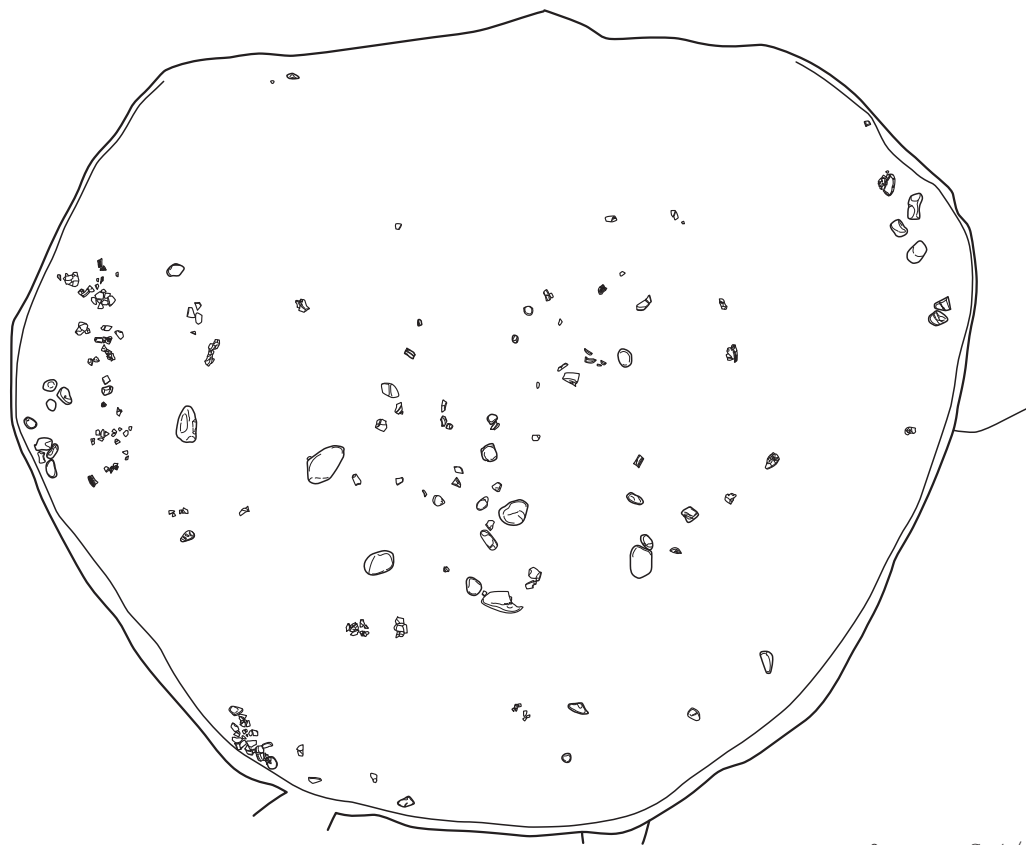
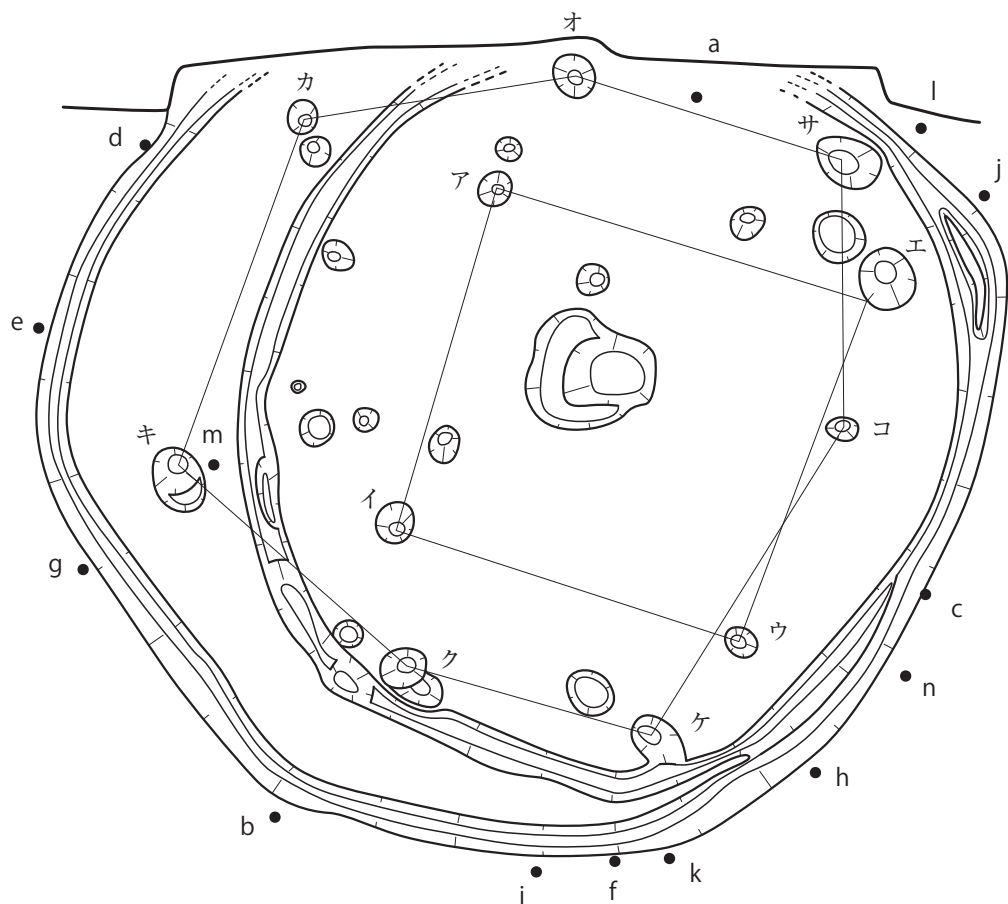
第2次調査区東端で確認した自然河道である。本調査区の北方第10次調査でも確認した。(野々市市 2015) 一部のみ掘削しており、その状況観察で幅 8.0 m 以上、深さ 1.0 m を測る。覆土からは、32、33 をはじめとする弥生土器や、38 の古代土師器、84、87 の石製品など多くの遺物が出土した。



第6图 SI、SB、SK、SX、P位置图



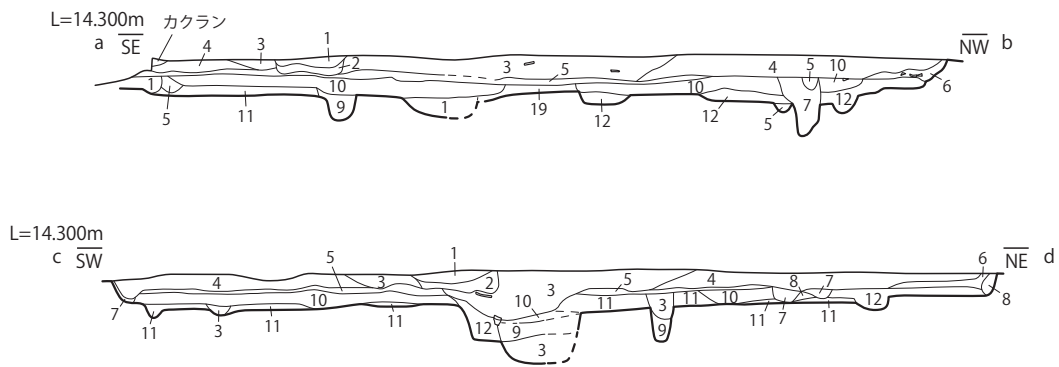
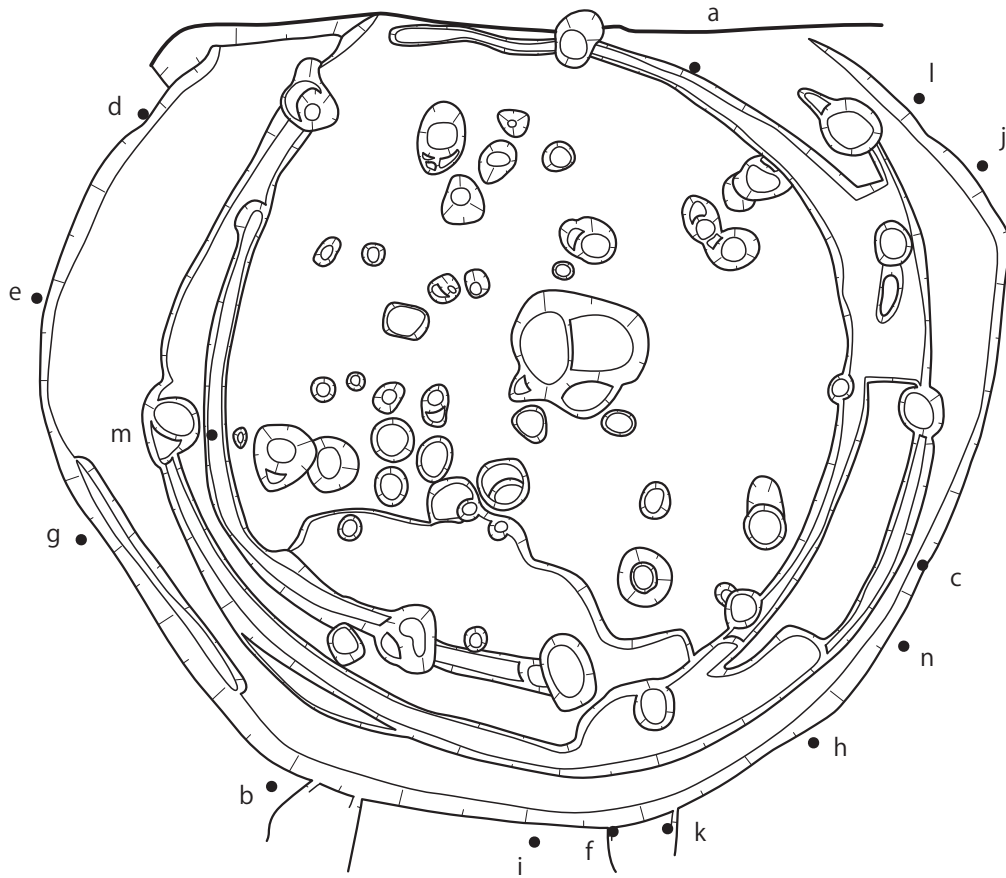
第7图 SA、SD位置图



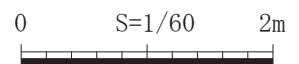
0 S=1/60 2m

第8図 SI 1 遺構図・遺物出土状況図 (S=1/60)

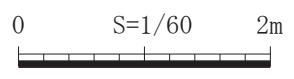




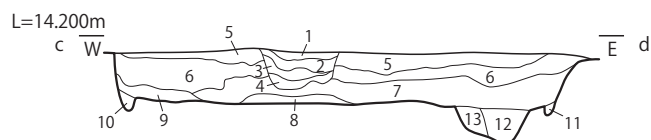
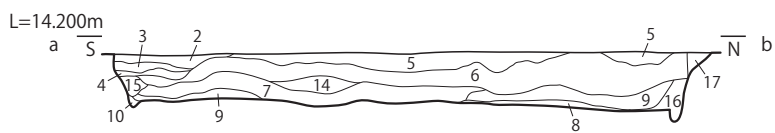
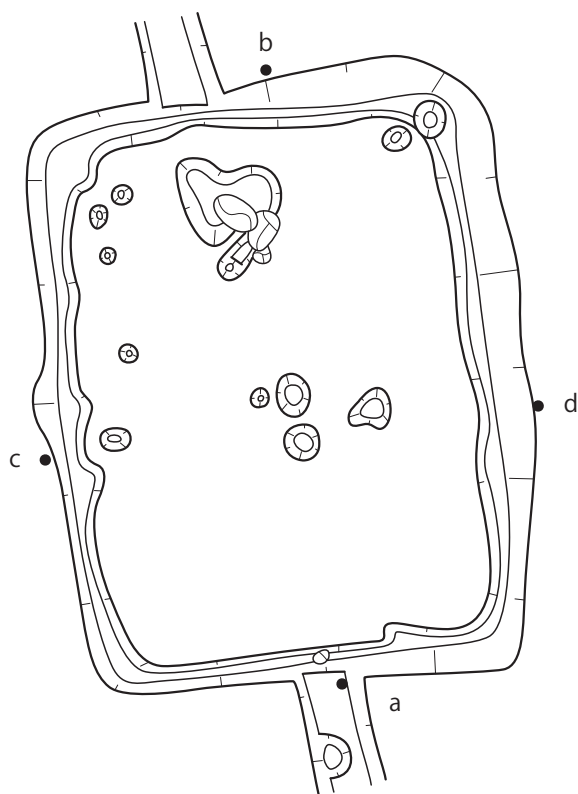
- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| 1. 黄褐、灰褐ブロック土混じり黒灰褐粘質土  | 7. 暗灰褐ブロック土混じり灰褐粘質土 |
| 2. 灰褐、黒灰褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土 | 8. 黄灰褐ブロック土混じり黒褐粘質土 |
| 3. 暗灰褐粘質土               | 9. 黄褐ブロック土混じり灰褐粘質土  |
| 4. 灰褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土     | 10. 黄褐ブロック土混じり褐灰粘質土 |
| 5. 黄褐、灰褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土  | 11. 暗灰褐粘質土混じり黄褐粘質土  |
| 6. 黄褐、暗灰褐ブロック土混じり灰褐粘質土  | 12. 淡黄灰色砂質土         |



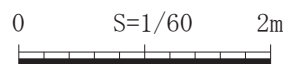
第9図 SI 1 床面下遺構図・土層断面図 (S=1/60)



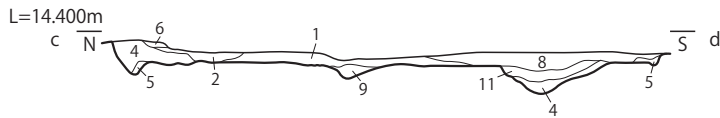
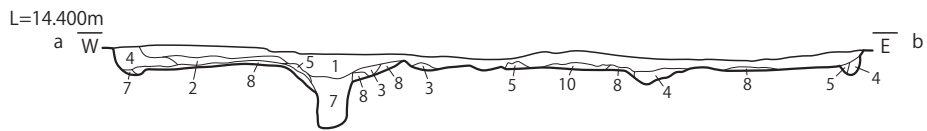
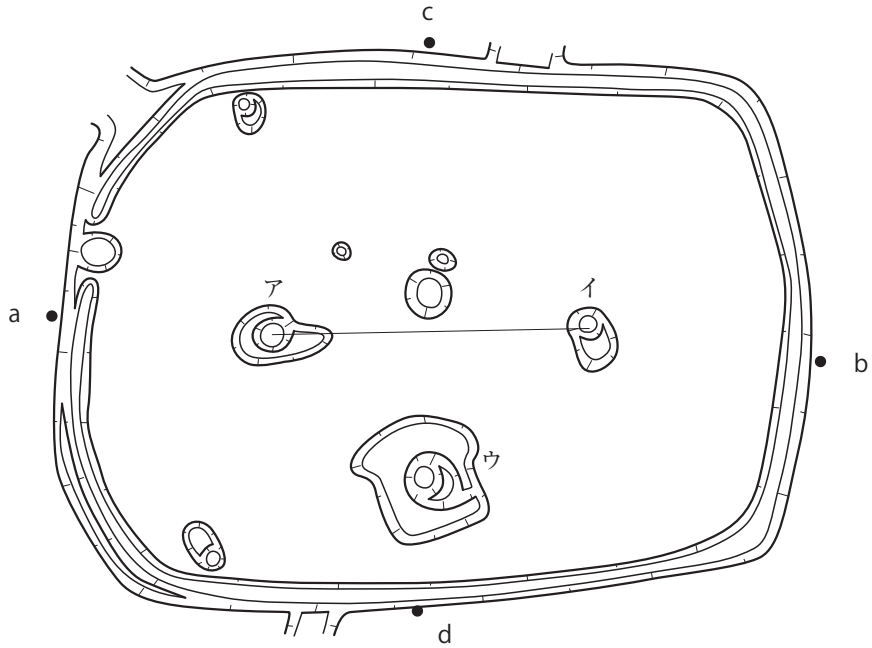
第 10 图 SI 1 断面图 (S=1/60)



- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| 1. 赤褐色砂土         | 10. 淡黄褐色粘質土          |
| 2. 明褐色砂土         | 11. 黄褐色粘質土           |
| 3. 灰白色砂土         | 12. 淡褐色粘質土           |
| 4. 濁暗灰色粘土        | 13. 褐灰色粘質土           |
| 5. 暗灰褐色粘質土       | 14. 淡暗褐灰色粘質土         |
| 6. 黄褐色粘質土 (やや暗い) | 15. 淡赤褐色粘質土          |
| 7. 淡暗褐色粘質土       | 16. 淡暗褐灰色粘質土         |
| 8. 暗灰色粘質土        | 17. 淡暗褐灰色粘質土 (やや明るい) |
| 9. 淡黄灰色粘質土       |                      |

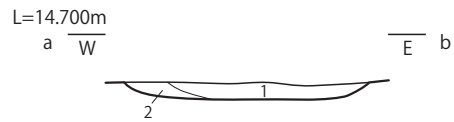
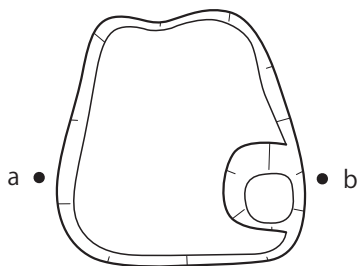
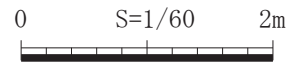


第 11 図 SI 2 遺構図・土層断面図 (S=1/60)



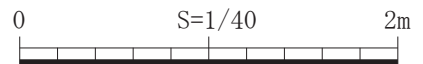
- |             |                  |            |             |
|-------------|------------------|------------|-------------|
| 1. 暗褐色粘質土   | 4. 褐色粘質土         | 7. 淡黄灰色粘質土 | 10. 暗灰色粘質土  |
| 2. 暗灰褐色粘質土  | 5. 淡灰褐色粘質土       | 8. 暗褐色粘質土  | 11. 淡暗灰色粘質土 |
| 3. 淡暗灰黄色粘質土 | 6. 淡黄色粒少混じり褐色粘質土 | 9. 灰褐色粘質土  |             |

SI 3

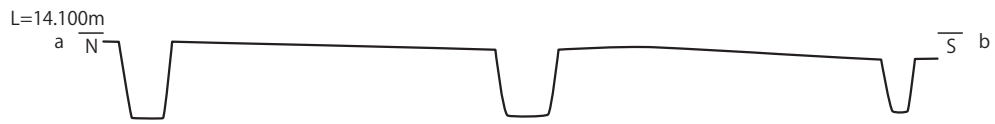
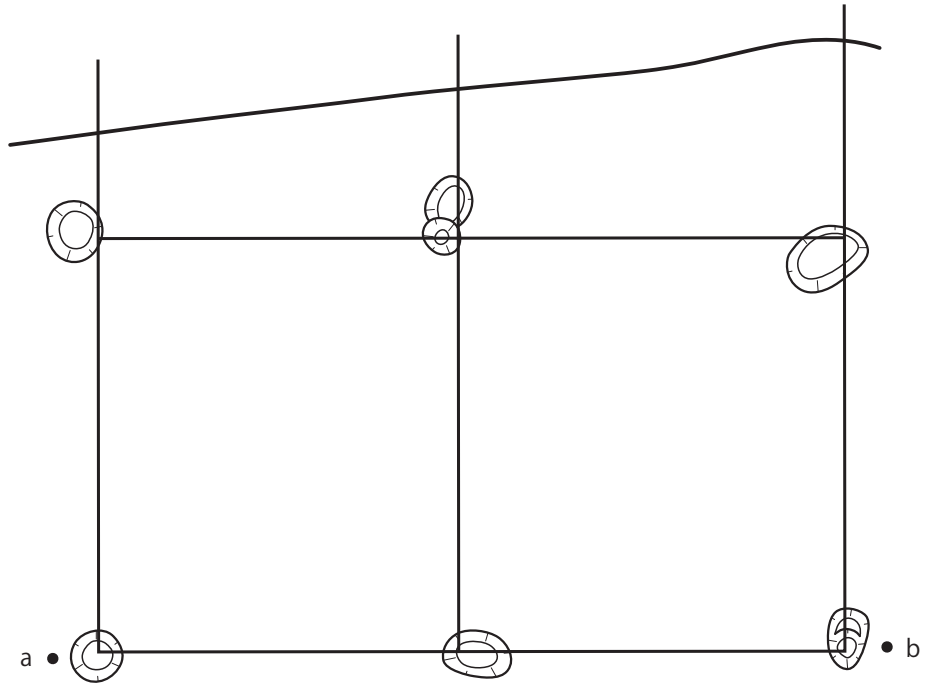


1. 灰褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土 (鉄分若干含む)
2. 黄褐、暗灰褐ブロック土混じり灰褐粘質土

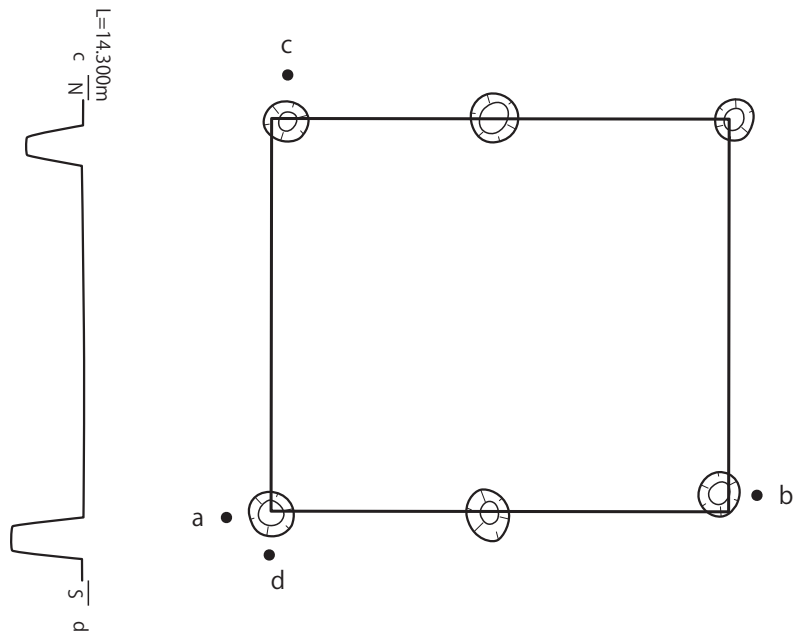
SI 4



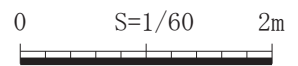
第 12 図 SI 3 (S=1/60)、SI 4 (S=1/40) 遺構図・土層断面図



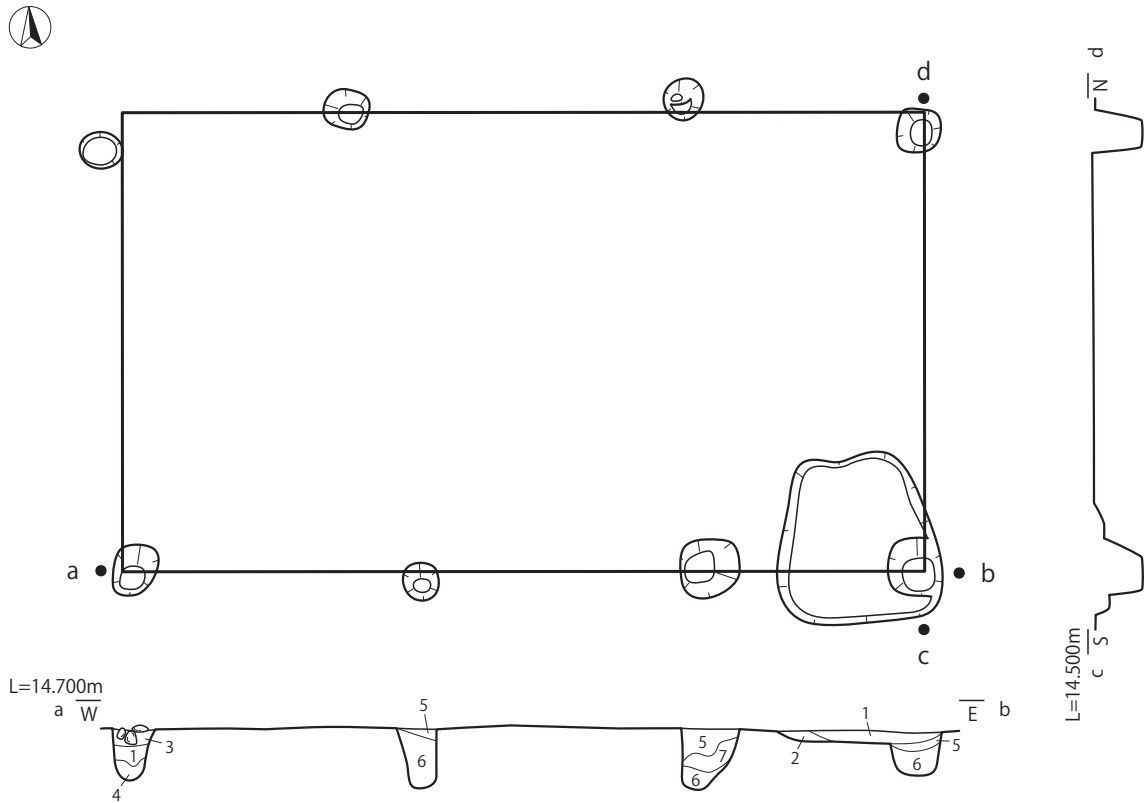
SB 1



SB 2

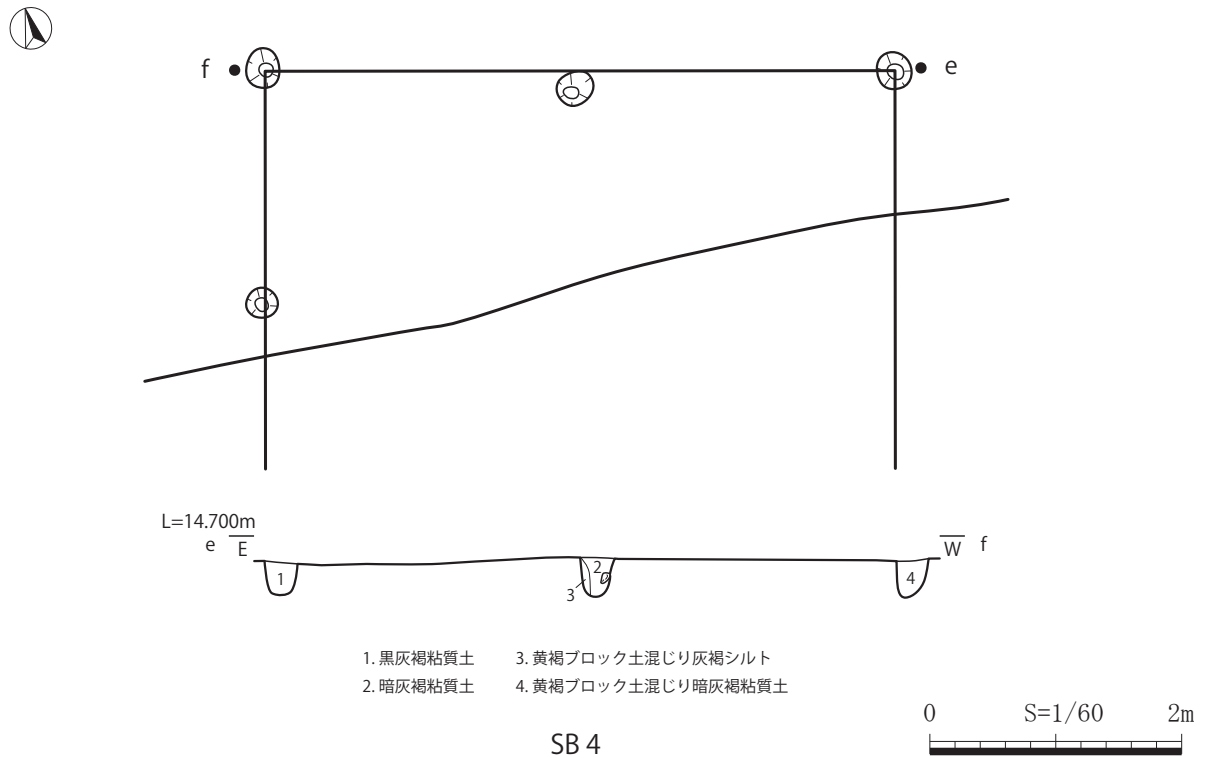


第 13 图 SB 1、2 遺構図・断面図 (S=1/60)



- |                        |                        |                         |
|------------------------|------------------------|-------------------------|
| 1. 黄褐ブロック土混じり灰褐粘質土     | 3. 礫 (10 cm大) 混じり灰褐粘質土 | 5. 黄褐、灰褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土  |
| 2. 黄褐、灰黒褐ブロック土混じり灰褐粘質土 | 4. 浅黄ブロック土混じり灰褐粘質土     | 6. 灰黄褐、暗灰褐ブロック土混じり灰褐粘質土 |
|                        |                        | 7. 黄褐、灰褐ブロック土混じり黒灰褐粘質土  |

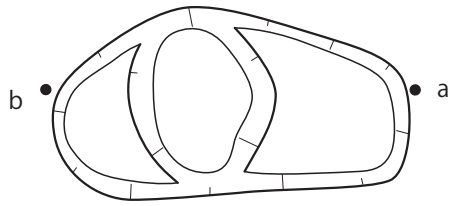
SB 3



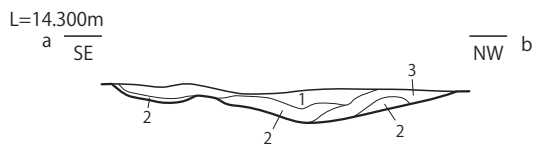
- |           |                     |
|-----------|---------------------|
| 1. 黒灰褐粘質土 | 3. 黄褐ブロック土混じり灰褐シルト  |
| 2. 暗灰褐粘質土 | 4. 黄褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土 |

SB 4

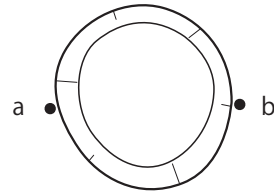
第 14 図 SB 3、4 遺構図・土層断面図 (S=1/60)



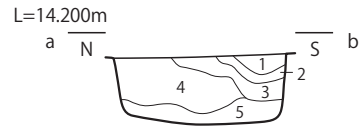
SK 1



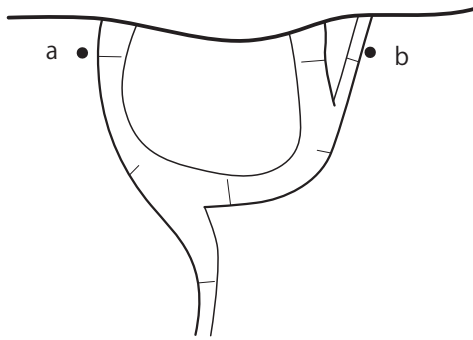
- 1. 暗灰褐粘質土
- 2. 暗灰褐ブロック土混じり黄褐粘質土
- 3. 黄褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土



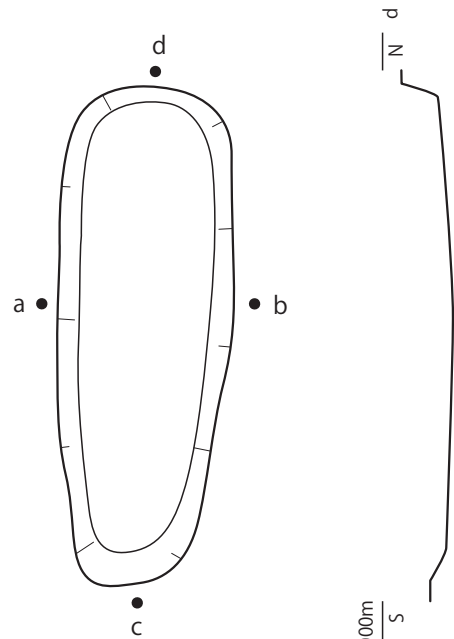
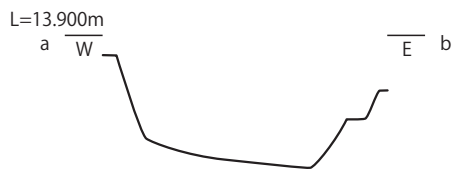
SK 2



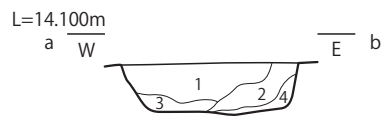
- 1. 暗褐色粘質土
- 2. 黄色粒混じり褐灰色粘質土
- 3. 暗灰褐色粘質土
- 4. 暗褐灰色粘質土
- 5. 暗灰色粘質土



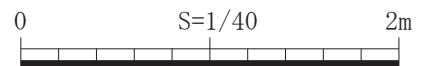
SK 3



SK 4



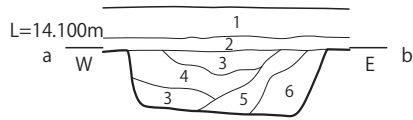
- 1. 黄色粒混じり褐灰色粘質土
- 2. 淡黄色粒多混じり褐灰色粘質土
- 3. 淡黄褐色粘質土
- 4. 黄色ブロック土混じり暗褐灰色粘質土



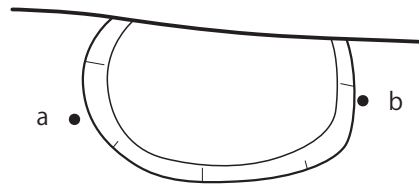
第 15 図 SK 1 ~ 4 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



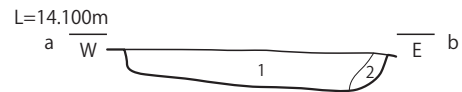
SK 5



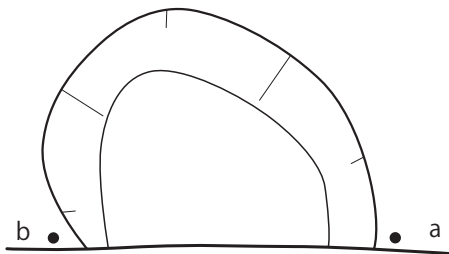
- 1. 耕作土
- 2. 橙褐色粘質土 (床土)
- 3. 黄色粒少混じり褐灰色粘質土
- 4. 黄色粒少混じり灰褐色粘質土
- 5. 褐灰色粘質土
- 6. 褐灰色粒混じり淡黄色粘質土



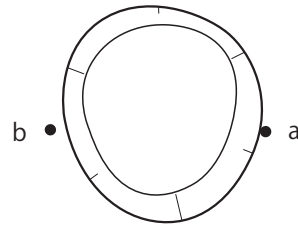
SK 6



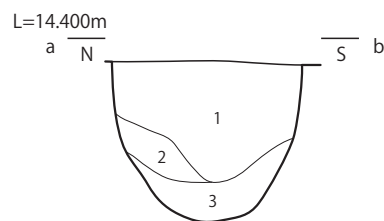
- 1. 黄色粒少混じり褐灰色粘質土
- 2. 黄色粒多混じり褐灰色粘質土



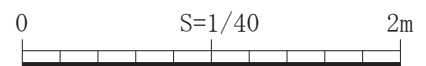
SK 7



SK 8

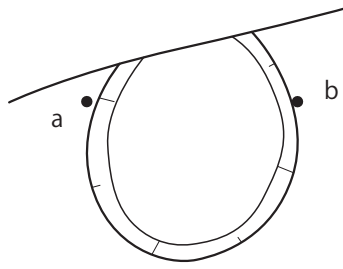


- 1. 黒色・黄色粒混じり淡褐灰色粘質土
- 2. 黄色土混じり淡褐灰色粘質土
- 3. 黒色粒混じり淡黄色粘質土



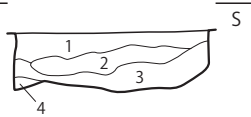
第 16 図 SK 5 ~ 8 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



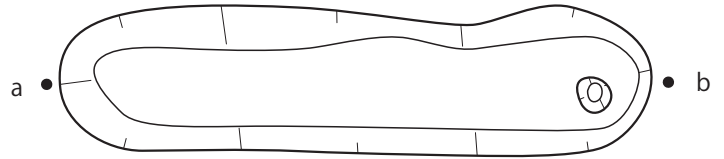


SK 9

L=14.400m  
N S



1. オリーブ灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 暗褐色粘質 (まだら)
4. 淡褐色灰色粘質土



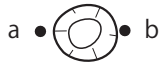
SK 10

L=14.800m  
a S



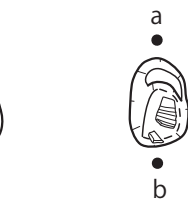
N b

1. 灰褐ブロック土混じり暗灰褐粘質土 (鉄分若干含む)
2. 黄褐、暗灰褐ブロック土混じり灰褐粘質土
3. 暗灰褐、灰褐ブロック土混じり黄褐粘質土



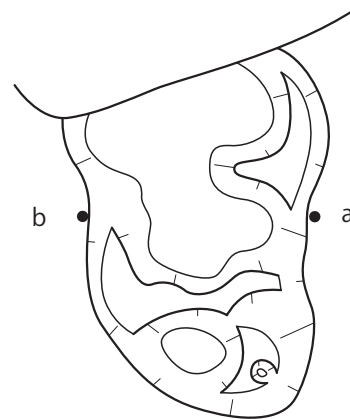
L=14.000m  
a S

P 1



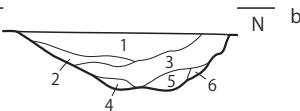
L=14.400m  
a N

P 2



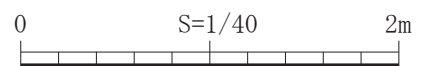
SX 1

L=14.200m  
a S

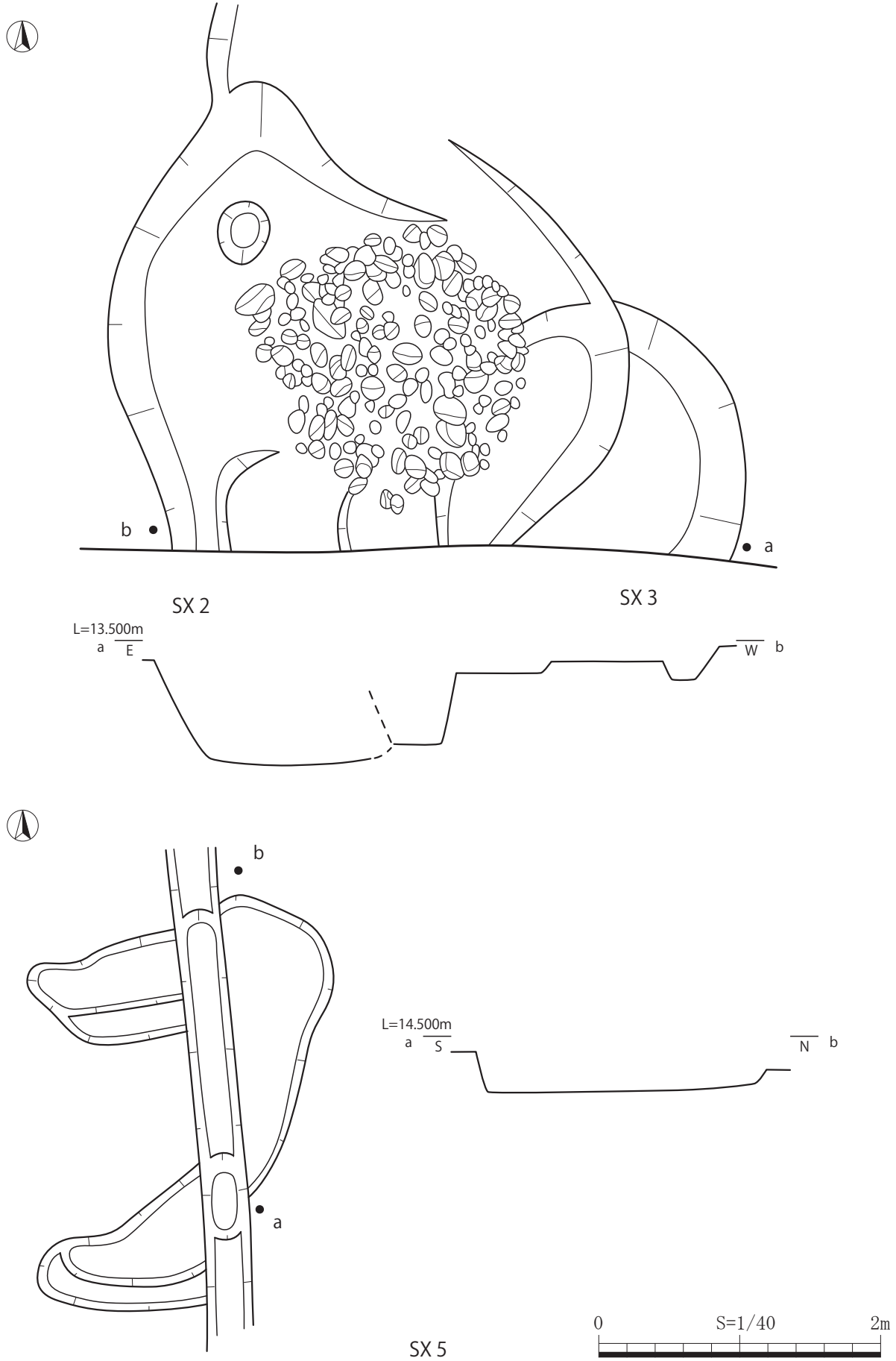


N b

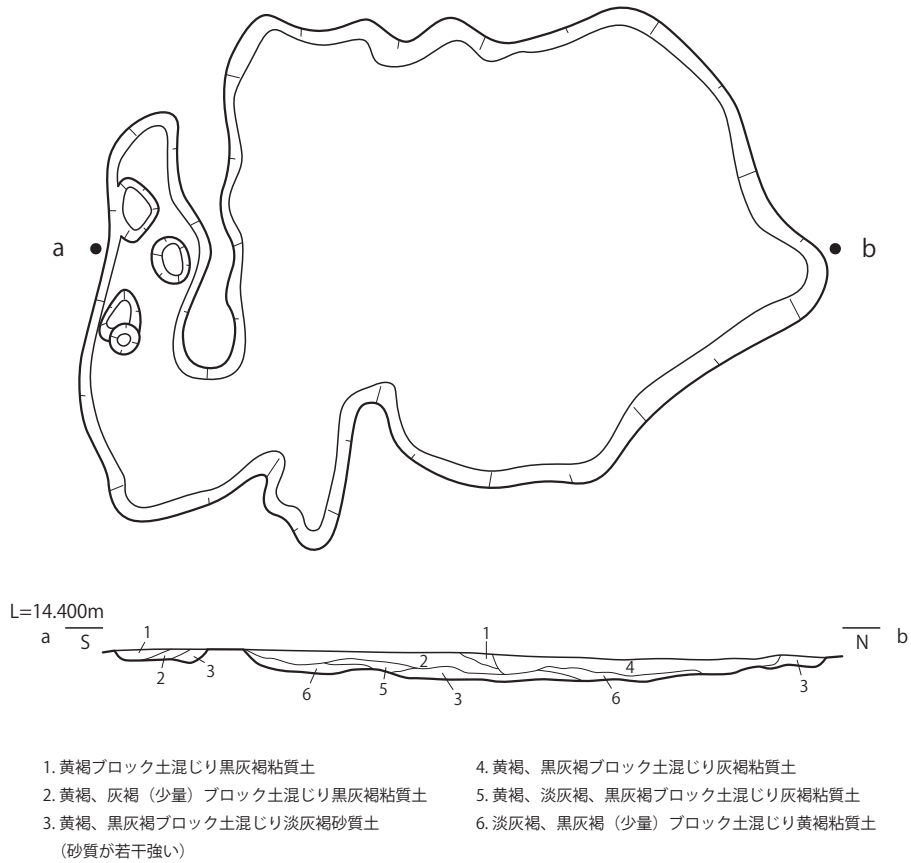
1. 灰褐色強粘質土
2. 淡暗灰色強粘質土
3. 暗灰色粘質土
4. 黄色土混じり灰色粘質土
5. 淡暗灰色粘質土
6. 灰色土混じり淡黄色粘質土



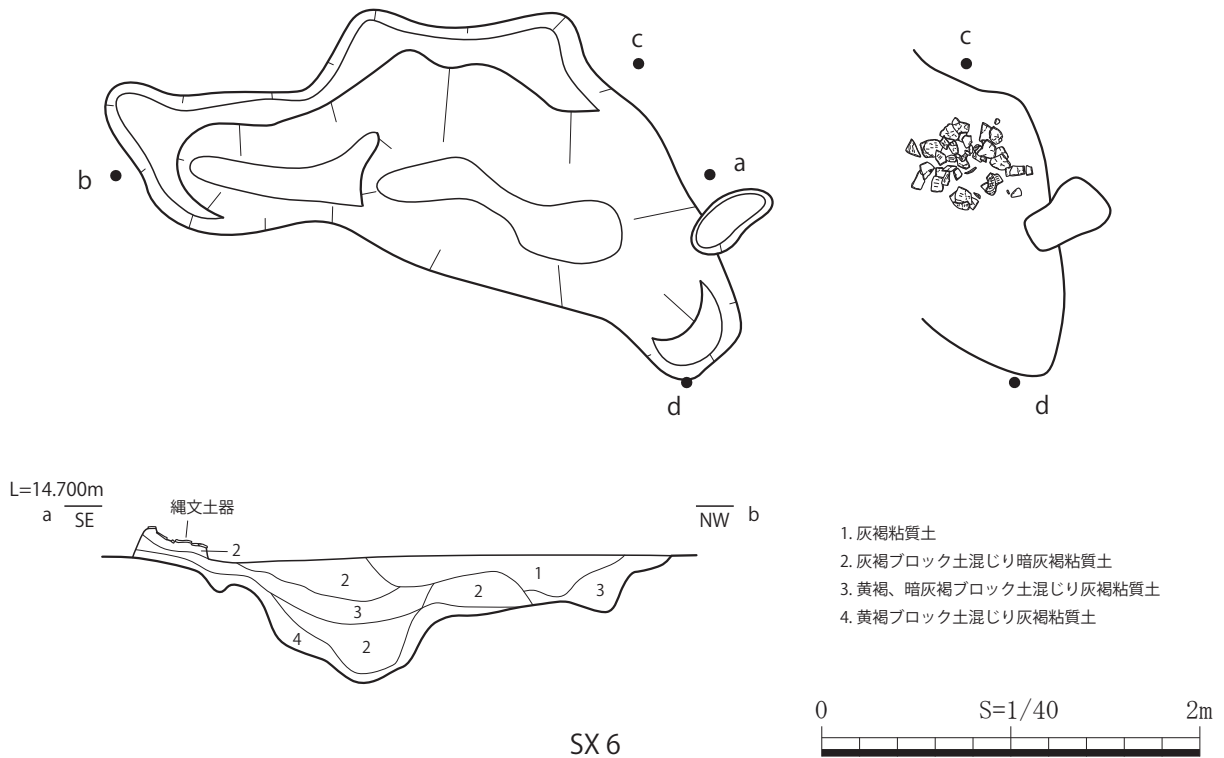
第 17 図 SK 9、10、P 1、2、SX 1 遺構図・土層断面図・遺物出土状況図 (S=1/40)



第18图 SX 2、3、5 遺構図・断面図 (S=1/40)



SX 4



第 19 図 SX 4、6 遺構図・土層断面図・遺物出土状況図 (S=1/40)

#### 第4節 遺物

出土遺物については、縄文時代、弥生時代、古代、中世の時期のものが出土している。

1～5、7・8・10は縄文時代後晩期の土器である。包含層から出土したものがほとんどであるが、1と4は黄褐色粘質土の地山土内から見つかった。出土した土器一帯で、遺構が存在した可能性があり、現地で詳細な精査を実施したが、地山面の土質と酷似していたことから、遺構を抽出することはできなかった。

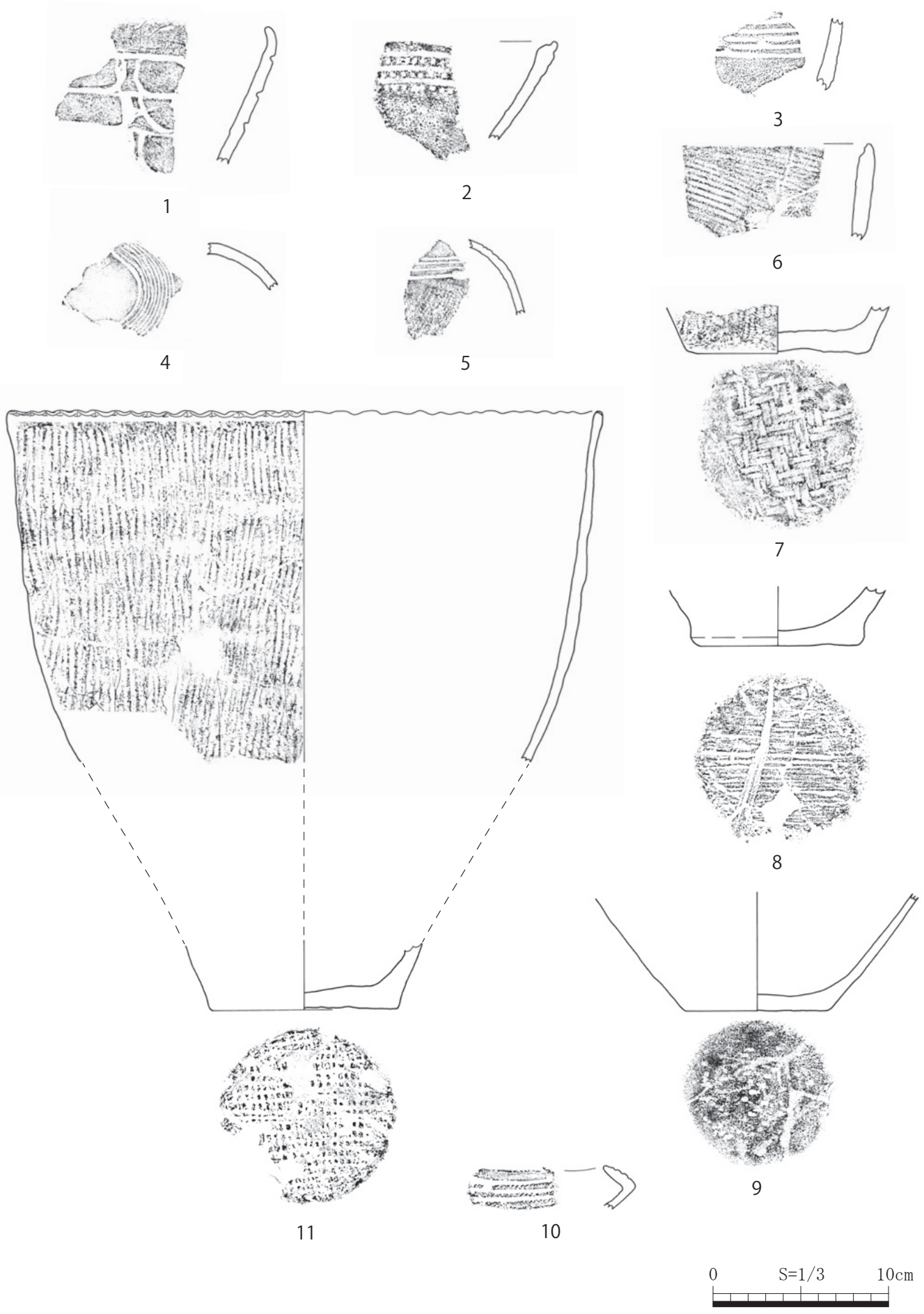
6・11は弥生時代前期の条痕文の甕である。12～36は弥生時代後期後半から終末期にかけての土器で、甕・壺・高坏・器台・蓋が見られる。全般的に後期後半が主体となる。

37は古代須恵器の瓶、38は土師器碗である。39・40は中世土師器皿、41～44は中世陶磁器である。14世紀を主体とする。

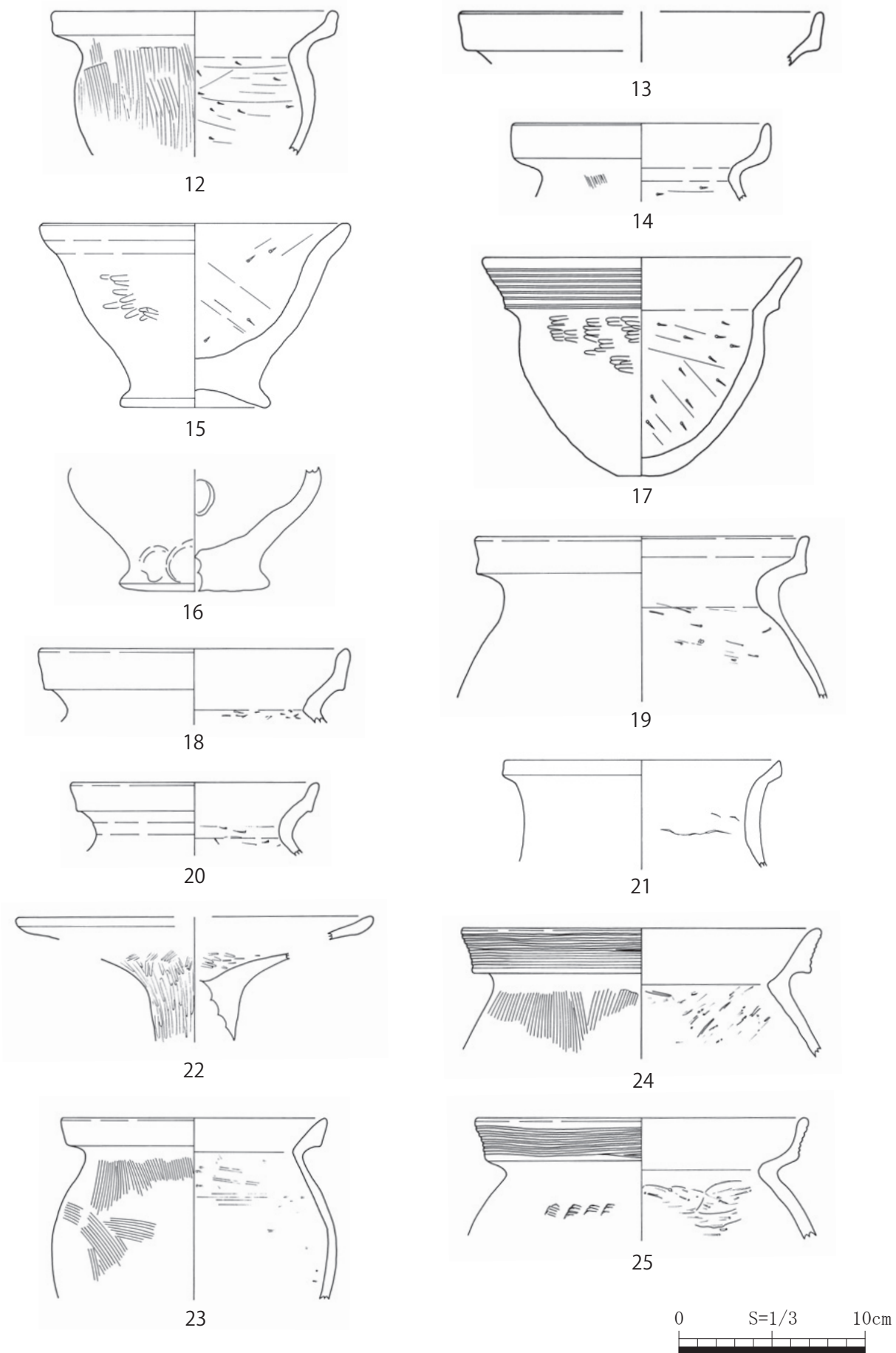
45～80は弥生時代を中心とした石鍬である。出土地点は調査区全体にわたり、ほとんどは包含層からである。出土品の大部分は刃こぼれしていたり、半分に割れていたり、土掘り作業を実施した痕跡が認められるが、70・71など未使用の製品も見受けられる。タイプは48・49の板状のもの、70～72のような基部から刃部に向かって幅が広がるもの、56・59のように中軸の幅が最も短い括れをもつものと、大きく3分類に分かれる。94～97はS I 1から出土した管玉製品と未成品である。弥生時代竪穴建物からは、85・86などの砥石も見つかっていることから、当該建物内で玉造りが行われていたようである。なお、観察表で表記している管玉製品と未成品の石材分類や調整は、徳丸ジョウジャダ遺跡の報告を使用させていただいた。A 1は濃緑色 硬質、A 2は濃緑色 硬質 白色粒・石英粒混じる、B 1は淡緑色 硬質、B 2は淡緑色 軟質 白色粒・石英粒混じる。(石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター 2010)

#### 参考文献

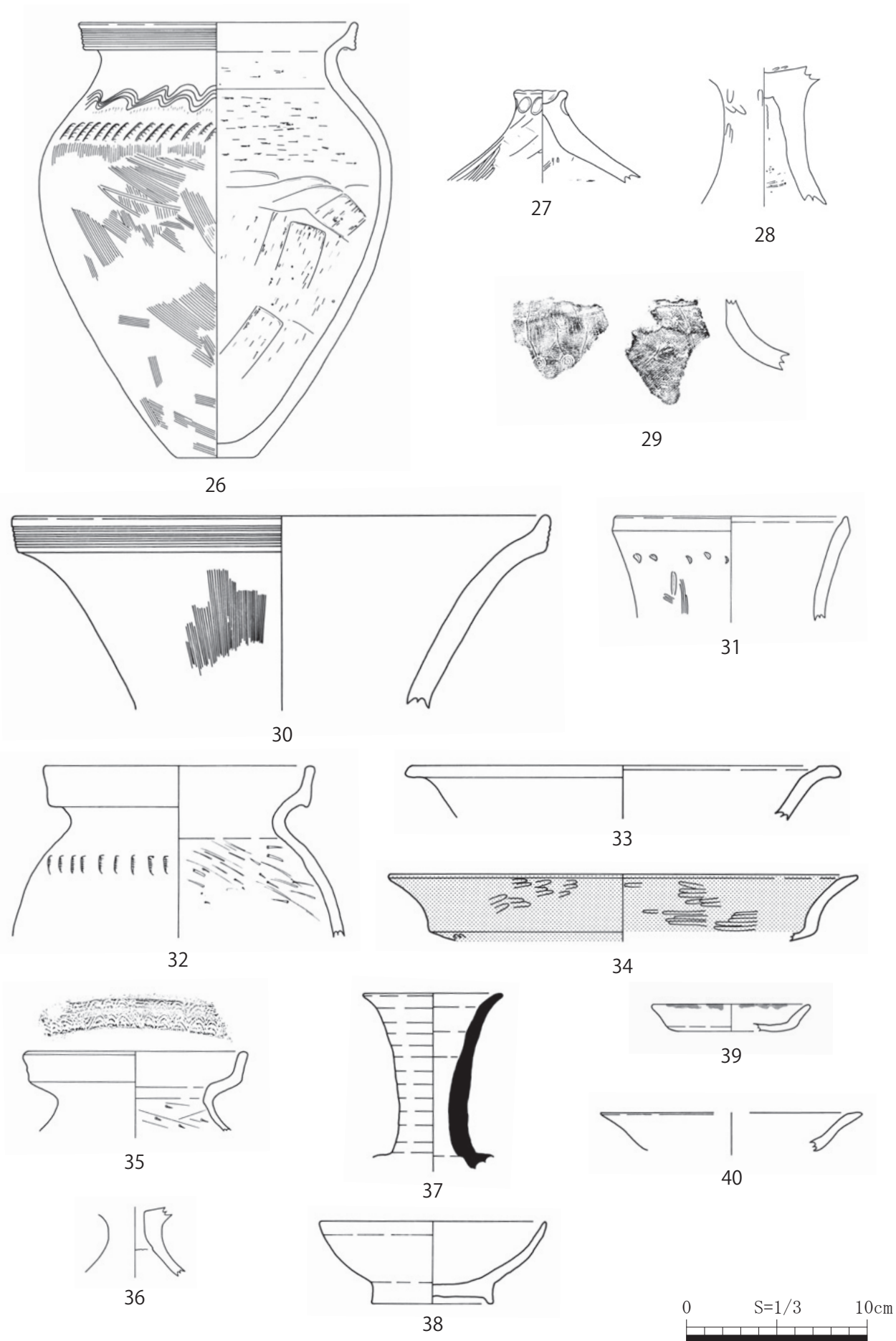
- |         |  |
|---------|--|
| 柿田祐司    | 2006「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会           |
| 河合忍 安英樹 | 1999「石鍬雑考」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』石川考古学研究会                  |
| 田嶋明人    | 1986「IV考察 漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター             |
|         | 1998「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会 北陸古代土器研究会 |
| 藤澤良祐    | 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院   |
| 藤田邦夫    | 1997「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房                    |
| 水澤幸一    | 2009「中世後期の貿易陶磁」『日本海流通の考古学』高志書院                             |
| 吉岡康暢    | 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館  |
|         | 2010『徳丸ジョウジャダ遺跡』石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター                   |
|         | 2011『二日市イシバチ遺跡』野々市市教育委員会                                   |
|         | 2012『二日市イシバチ遺跡2』野々市市教育委員会                                  |
|         | 2013『二日市イシバチ遺跡3』野々市市教育委員会                                  |
|         | 2015『二日市イシバチ遺跡5』野々市市教育委員会                                  |



第 20 図 遺物実測図 1 (S=1/3)



第 21 図 遺物実測図 2 (S=1/3)



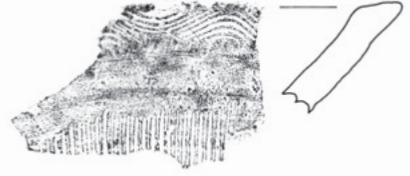
第 22 図 遺物実測図 3 (S=1/3)



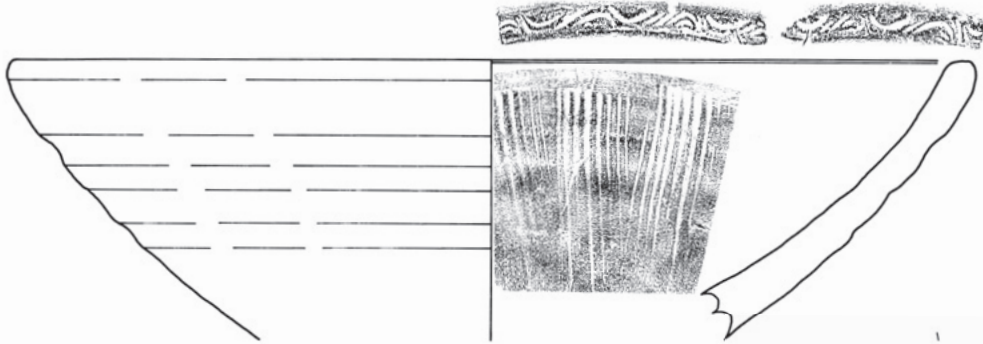
41



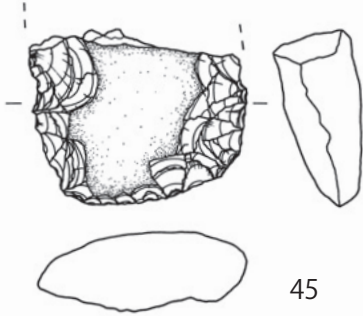
42



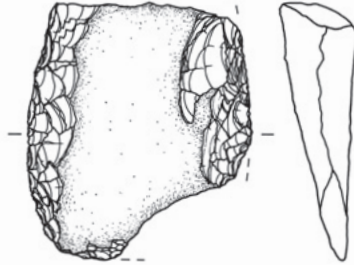
43



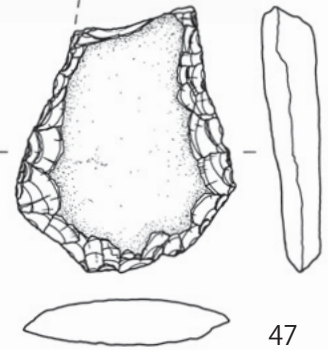
44



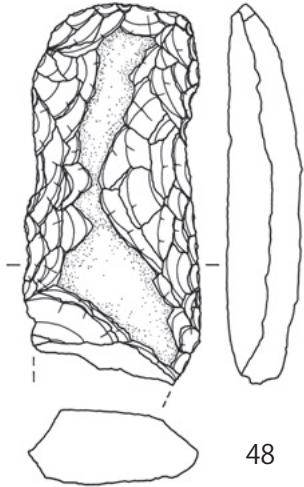
45



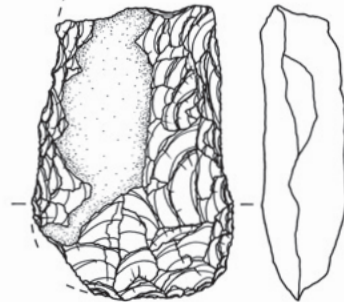
46



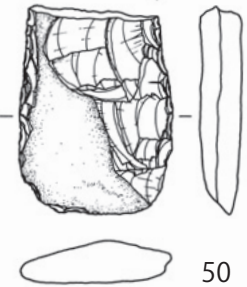
47



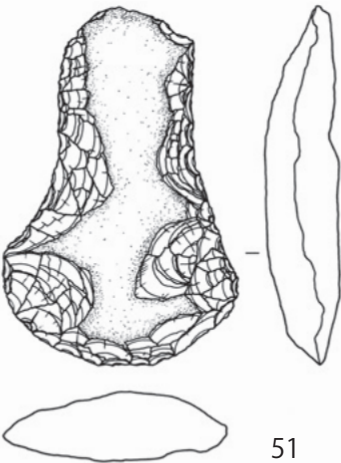
48



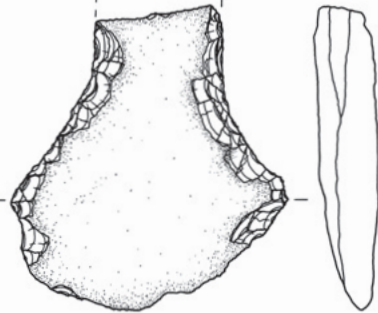
49



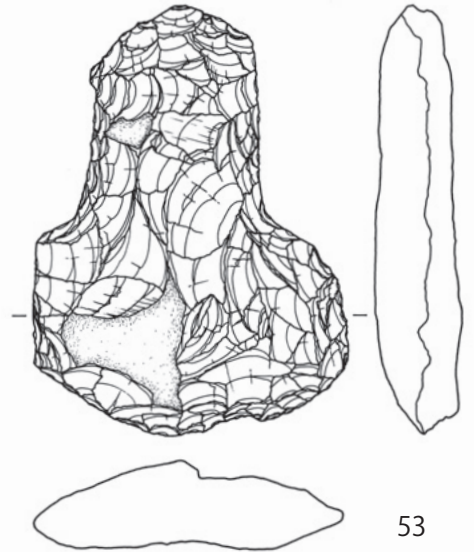
50



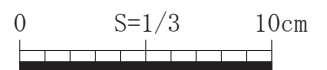
51



52

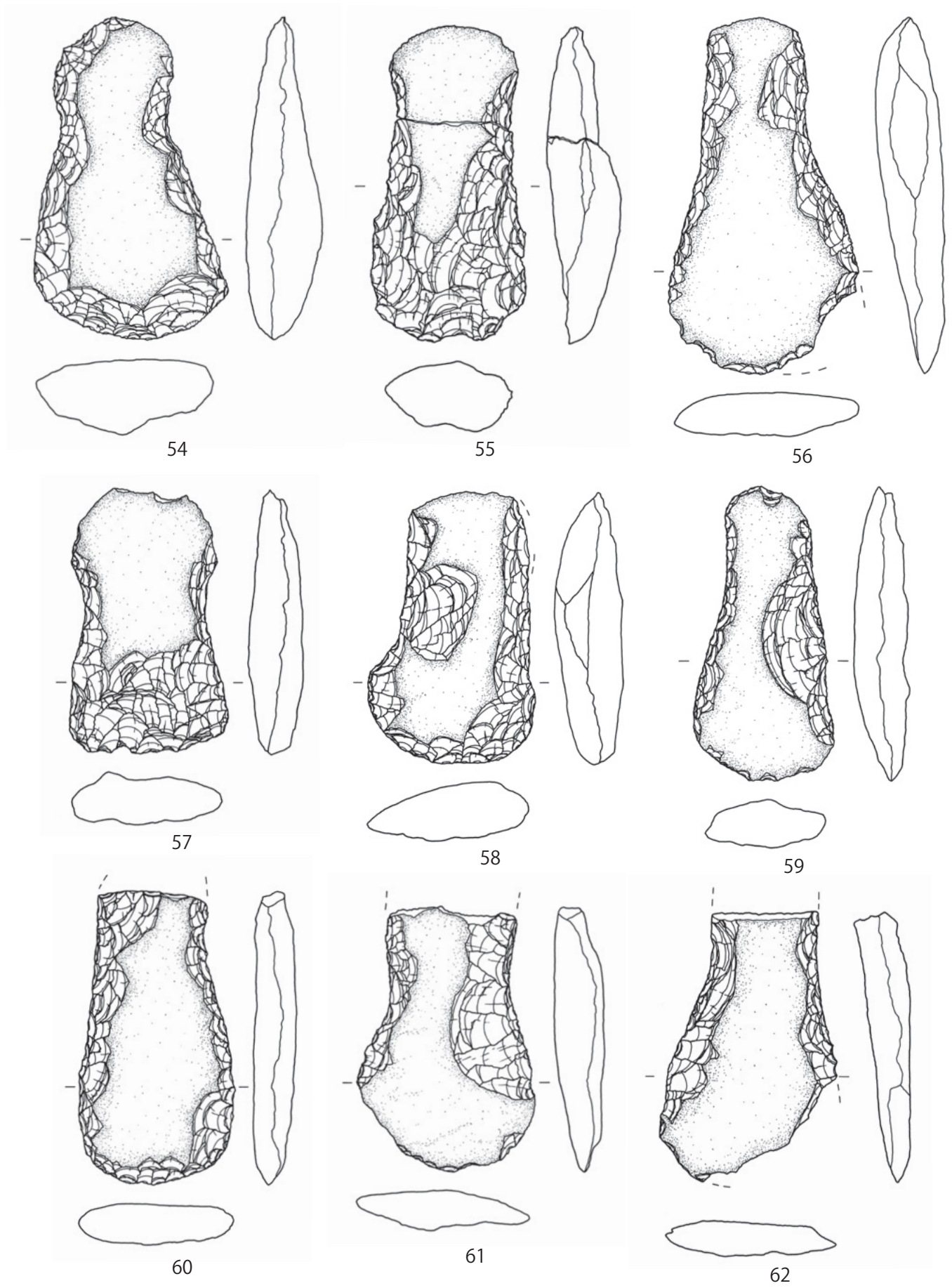


53



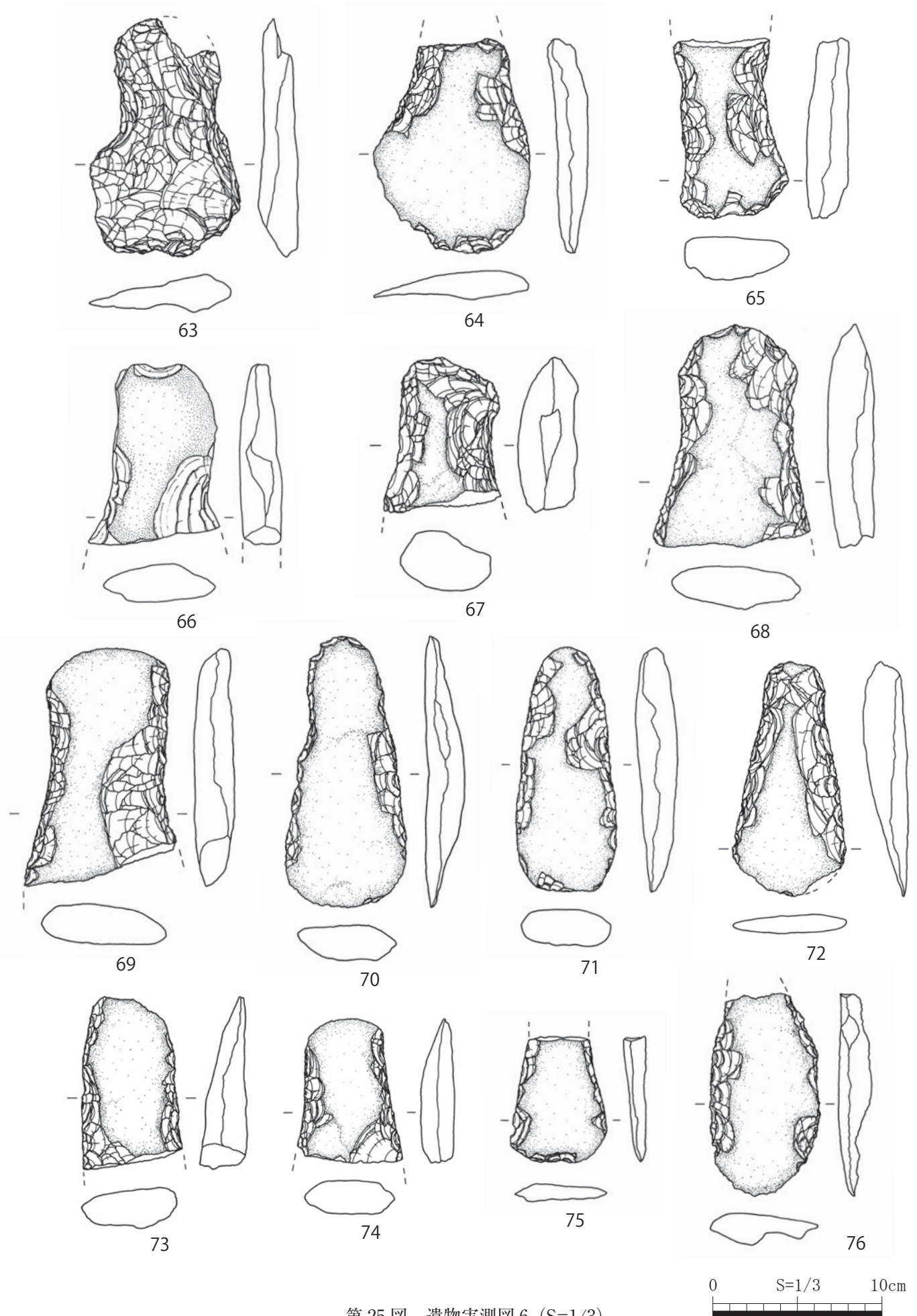
第 23 図 遺物実測図 4 (S=1/3)



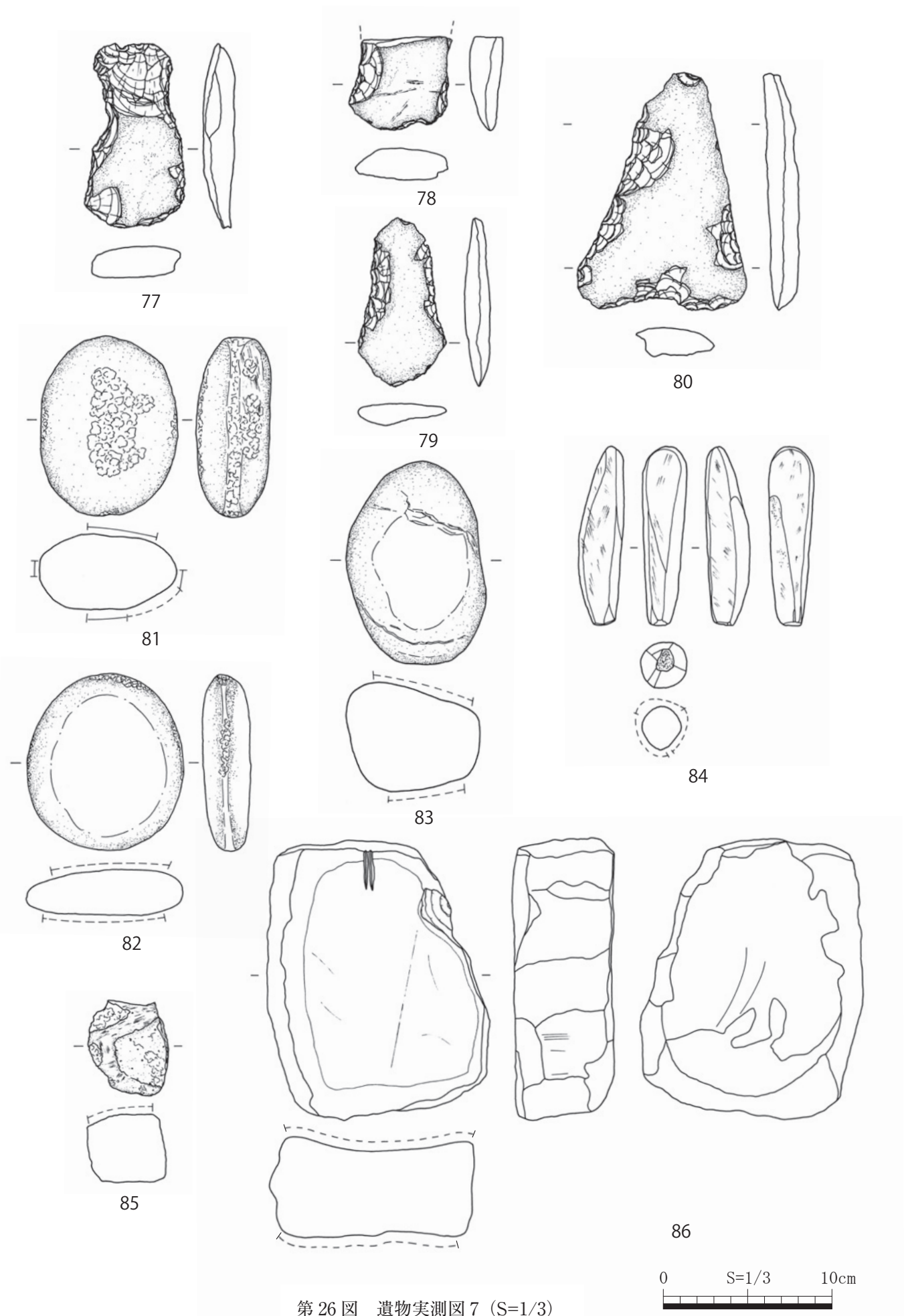


第 24 図 遺物実測図 5 (S=1/3)

0 S=1/3 10cm

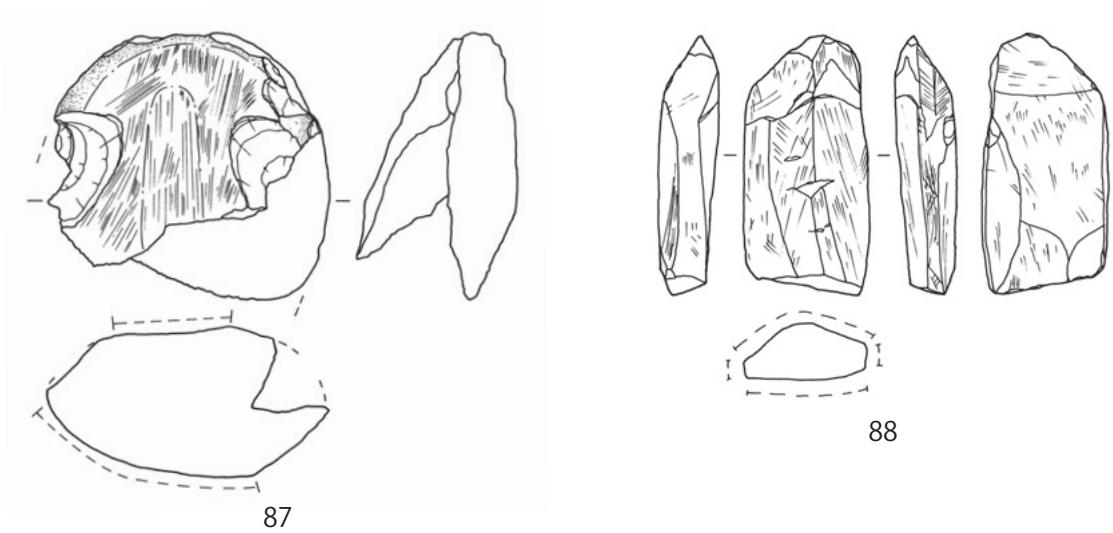


第 25 図 遺物実測図 6 (S=1/3)



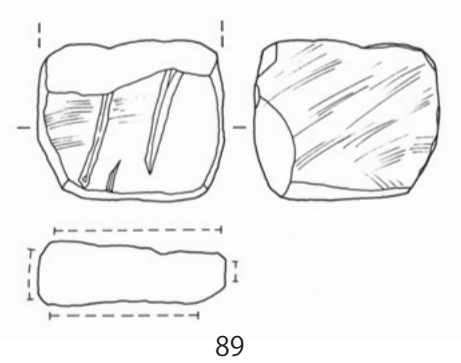
第 26 図 遺物実測図 7 (S=1/3)

0 S=1/3 10cm

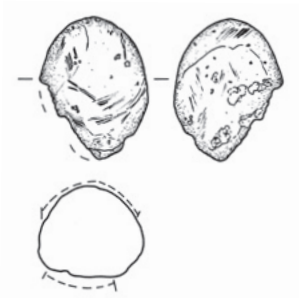


87

88

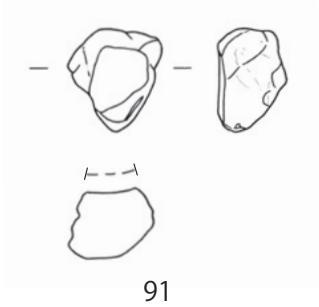


89

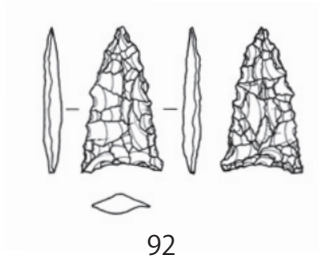


90

0 S=1/3 10cm



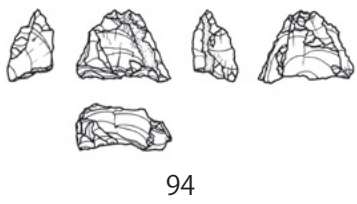
91



92



93

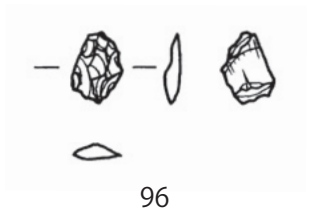


94



95

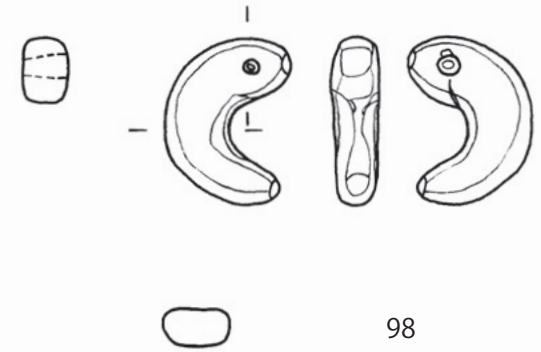
0 S=1/2 10cm



96



97



98

0 S=1/1 5cm

第 27 図 遺物実測図 8 (87 ~ 90 (S=1/3)、91 ~ 95 (S=1/2)、96 ~ 98 (S=1/1))

## 第4章 総括

### 縄文時代

本調査区における縄文時代については、土器を数十点確認したに過ぎなかった。第3章第4節でも触れたが、出土した土器のほとんどは暗灰褐色粘質土の包含層からであるが、1と4は黄褐色粘質土の地山土内から見つかった。出土した土器の周りに遺構が存在した可能性もあったが、地山面の土質と酷似しており、遺構を確認することはできなかった。この地山面とした黄褐色粘質土層の下に縄文時代の遺構面が存在する可能性もあるが、従前の調査でこれより下は手取川扇状地特有の砂礫層であることが分かっており、遺構面を確認することは困難である。

### 弥生時代

6と11のように弥生時代前期の土器も見つかってはいるが、主体は後期である。

本調査区では、3棟の竪穴建物と2棟の掘立柱建物を検出した。3棟の竪穴の詳細時期については後期後半に位置づけられる。竪穴建物や掘立柱建物はそれぞれ離れた箇所で見つかっている。本調査区の西方30m付近には弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴建物が40棟近く集中して見つかり、この地が集落の中心になると考えられる。本調査区エリアは集落の中心から外れた縁辺部になると思われる。

また、本調査区一帯には石鍬が多く出土した。本地一帯で根茎類大量採取などを目的としたものと考えられるが、出土点数頻度が極めて高いことから左記目的以外に使われていたことも考えなければならない。なお、石鍬は縄文時代から使用されているが、弥生時代の遺構・土器が多いことから本項で取り扱った。

### 古代

9世紀以降の須恵器と土師器を数点確認した。見つかった地点のほとんどは自然河道からである。本時期の中心は、本調査区から南方約300mにある三日市A遺跡であり、今回見つかった遺物は三日市A遺跡からの流れ込みと考えられる。

### 中世

本調査区では1棟の竪穴状遺構、2棟の掘立柱建物、土坑、溝、柵列などを確認した。遺物は、14世紀を中心とした土師器皿、瀬戸焼天目茶碗、珠洲焼播鉢、中国産青磁碗など日常雑器が見つかるが、総体的に出土量は少ない。本調査区の東端、SB1周辺一帯は土坑などの遺構が多く抽出していることから、集落域の一端になるかもしれない。その他のエリアは、溝と柵列で区画割されていることから、耕作地として利用されていたと考えられる。

第2表 土器観察表

番号	遺構	器種	口径	器高	底径	調整 (外)	色調 (外)	残存率	備考	実測 番号
			(mm)	(mm)	(mm)	調整 (内)	色調 (内)			
1	地山内	縄文土器 浅鉢					にぶい黄橙、黒褐 にぶい橙	小片	黒斑 骨針	N13
2	包含層	縄文土器 浅鉢				ナデ、沈線、刺突文 ナデ、無文	橙 にぶい黄橙	小片		T36
3	包含層	縄文土器				沈線文	にぶい黄橙 橙	小片	半截竹管	T19
4	地山内	縄文土器				カキ目 ナデ	にぶい黄橙 橙	小片		N17
5	包含層	縄文土器				沈線	にぶい褐、にぶい黄褐 橙、にぶい黄	小片	煤付着	N19
6	包含層	弥生土器 壺				条痕 ナデ、指押え、無文	明黄褐 明黄褐	小片		T37
7	包含層	縄文土器			104	縄文	灰黄褐 にぶい黄橙	底部 2/3	網代圧痕	N1
8	包含層	縄文土器 底部			95	ナデ ナデ	橙 黄灰	底部全周	棒状工具	T29
9	包含層	甕			82		橙、にぶい黄褐 にぶい橙、橙	底部全周	網代圧痕 (摩耗)	N20
10	SI 1	縄文土器 深鉢				沈線文、縄文 条痕	にぶい橙 にぶい橙、褐灰	小片		T3
11	SX 6	弥生土器 甕	340	体部径 160	106	条痕 ナデ	明黄褐、にぶい黄橙 にぶい黄橙、褐灰	底部、口縁部ほぼ完形 体部 1/2	海綿骨針 網代圧痕	T55
12	SI 1	甕	154			ヨコナデ、ハケ、ナデ ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	口縁部2/3、頭部1/3 体部 1/3		T6
13	SI 1	甕	196			ヨコナデ ヨコナデ	浅黄橙 浅黄橙	口縁部1/9		T1
14	SI 1	甕	138			ヨコナデ、ハケ、ナデ ヨコナデ、ケズリ	灰黄褐 にぶい黄橙	口縁部4/6 頭部1/6		T9
15	SI 1	台付鉢	166	98	80	ヨコナデ、ナデ、ミガキ ヨコナデ、ケズリ、ナデ	浅黄橙、にぶい橙 浅黄橙、にぶい橙	口縁部1/2、体部1/2 底部全周		T4
16	SI 1	鉢			80	ナデ ナデ	浅黄橙 灰白	底部1/4	指頭圧痕 底部に煤付着	T2
17	SI 1	鉢	170	117	20	ヨコナデ、ミガキ、ナデ ヨコナデ、ケズリ、ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	口縁部7/9、底部全周 体部径1/3	擬凹線 7 条	T5
18	SI 2	甕	170	頭部径 136		ヨコナデ ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	口縁部2/9		N12
19	SI 2	甕	180	頭部径 148		ヨコナデ、ケズリ、ナデ ヨコナデ、ナデ	橙、明黄褐、にぶい黄橙 橙、明黄褐、にぶい黄橙	口頸部5/6	内面に煤付着	N8
20	SI 2	甕	134	頭部径 105		ヨコナデ ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙、にぶい黄褐 にぶい黄橙	口縁部1/3	外面に煤付着	N11
21	SI 2	壺	150	頭部径 125			にぶい黄橙 にぶい黄橙、褐灰	口頸部3/4	摩耗、歪みあり 粘土紐痕	N9
22	SI 2	高杯		柱状部 48	裾部 192	ハケ、ミガキ ケズリ、ミガキ	にぶい黄橙、明褐 浅黄橙	裾部1/3 柱状部1/2	赤彩	N10
23	SI 3	甕		頭部径 116	体部径 152	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ケズリ	にぶい橙 にぶい黄橙	口頸部4/5 胴部1/4	外面に煤付着	O8
24	SI 3	甕	192	頭部径 158		ナデ、ハケ ヨコナデ、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	口縁部1/5	擬凹線 7 条	O4
25	SI 3	甕	179	頭部径 145		ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄 にぶい黄橙	口縁1/3、頭部1/4 体部 小片	擬凹線 6 条、櫛目文 工具による押圧文	O10
26	SI 3	甕	153	240	45	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ケズリ、ナデ	橙～浅黄橙 橙～灰白	口縁3/4、頭部全周 体部3/4、底部3/4	擬凹線 5 条、櫛目文、波状文 外面に煤付着	O11
27	SI 3	蓋		つまみ径 29		ミガキ ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	つまみ部先端1/2	内側に工具痕	O1
28	SI 3	高杯		柱状部 44		ミガキ ナデ、ケズリ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	柱状部全周		O2
29	SI 3	器台				ハケ ケズリ、ナデ	浅黄橙 浅黄橙	小片	スタンプ文 竹管文	O5

番号	グリッド 遺構	器種	口径	器高	底径	調整 (外)	色調 (外)	残存率	備考	実測 番号
			(mm)	(mm)	(mm)	調整 (内)	色調 (内)			
30	SI 3	壺	296	頸部径		ヨコナデ、ハケ、ナデ	にぶい黄橙	口縁部1/14 頸部1/4	擬凹線 4 条 外面に煤付着	O9
				170		ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙			
31	SI 3	壺	130			ハケ、ナデ	浅黄橙	口縁部1/4	刺突文	O7
						ナデ	浅黄橙			
32	自然河道	甕	150	頸部径 118		ヨコナデ、ナデ	明黄橙、にぶい黄橙	口頸部1/4	刺突文	N2
						ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙			
33	自然河道	高杯	240			ヨコナデ	にぶい黄橙	口縁部1/4		N15
						ヨコナデ	にぶい黄橙、にぶい赤褐			
34	包含層	高杯	260			ミガキ	赤褐	口縁部1/18	全体に摩耗	T18
						ミガキ	にぶい黄橙			
35	包含層	甕	124			ヨコナデ	にぶい黄橙	口縁部1/4 頸部1/3	波状文 部分的に煤付着	T20
						ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙			
36	包含層	器台		柱状部 30		ナデ	浅黄橙	柱状全周		O12
						ナデ	浅黄橙			
37	SD 12	須恵器 長頸瓶	78	頸部径 47		ロクロナデ	灰、オリーブ黒	口縁部1/18 頸部全周	自然釉	N16
						ロクロナデ	灰			
38	自然河道	土師器 有台碗	126	45	68	ロクロナデ	にぶい橙	口縁部1/7 底部5/6	摩耗	N14
						ロクロナデ	にぶい橙			
39	P 1	土師器 皿	88	15		ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙	口縁部5/36	灯芯油煤付着	N22
						ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙			
40	SD 2	土師器 皿	144			ナデ	浅黄橙	口縁部1/12	摩耗	N23
						ナデ	にぶい黄橙			
41	SD 2	青磁 碗			62		灰オリーブ	底部1/6	青磁釉	N24
							灰オリーブ			
42	SD 2	瀬戸焼 天目茶碗	127				黒、暗褐	口縁部1/9	鉄釉	N25
							黒、暗褐			
43	SX 1	珠洲焼 播鉢	366				灰	小片	波状文 内面に煤付着	N26
							灰			
44	P 2	珠洲焼 播鉢	382			ヨコナデ	にぶい黄橙	口縁部1/6	波状文、海綿骨針 外面に煤付着	T30
						ヨコナデ	灰黄褐			

第3表 石製品観察表

番号	グリッド	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石 材	備 考	実測 番号
	遺構		(mm)	(mm)	(mm)	(g)			
45	包含層	打製石斧	70	86.5	35	220	火山礫凝灰岩		T26
46	カクラン	打製石斧	102	89	31	280	流紋岩		T25
47	カクラン	打製石斧	106	87	24	195	火山礫凝灰岩		T24
48	自然河道	打製石斧	150	70	30	415	火山礫凝灰岩		N7
49	包含層	打製石斧	118	80	34	385	火山礫凝灰岩		T42
50	包含層	打製石斧	83	61	17	125	流紋岩		T27
51	包含層	打製石斧	143	88	29	370	火山礫凝灰岩	完形	T32
52	包含層	打製石斧	170	125	35	555	角閃石安山岩	完形	T39
53	包含層	打製石斧	120.5	110	26	322	凝灰岩		T35
54	包含層	打製石斧	181.5	111	43	790	火山礫凝灰岩	完形	T38
55	包含層	打製石斧	179	81	42	540	緑色凝灰岩	完形	T34
56	包含層	打製石斧	200	107	38	725	火山礫凝灰岩		T41
57	包含層	打製石斧	150	90	31	460	流紋岩	完形	T31
58	包含層	打製石斧	153	95	39	600	火山礫凝灰岩		T49
59	包含層	打製石斧	166	72.5	32	350	流紋岩	完形	T54
60	包含層	打製石斧	166	88	24	445	火山礫凝灰岩		T47
61	包含層	打製石斧	150	101	28	420	花崗斑岩		T53
62	SK 7	打製石斧	152	101	32	400	凝灰岩	自然面砥石転用か？	N21
63	包含層	打製石斧	141	90	24	180	流紋岩		T46
64	包含層	打製石斧	127	93	24	210	安山岩		T44
65	包含層	打製石斧	107	68	25	200	砂岩		T48
66	SX 5	打製石斧	107	78	25	208	凝灰岩		O13
67	包含層	打製石斧	92	69	35.5	270	石英安山岩		T16
68	包含層	打製石斧	132	93	28	390	火山礫凝灰岩		T45
69	包含層	打製石斧	141	90	24	378	火山礫凝灰岩		T52
70	包含層	打製石斧	161	72	23	248	花崗斑岩	完形	T40
71	包含層	打製石斧	145	60	25	240	凝灰岩	完形	T23
72	包含層	打製石斧	139	67	26	190	花崗斑岩	ほぼ完形	T43
73	包含層	打製石斧	102	59	28	175	火山礫凝灰岩		T21
74	包含層	打製石斧	85.5	62.5	20	120	緑色凝灰岩		T28



番号	グリッド 遺構	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石 材	備 考	実測 番号
			(mm)	(mm)	(mm)	(g)			
75	自然河道	打製石斧	74	57	13	60	火山礫凝灰岩		N5
76	包含層	打製石斧	120	66	20	130	緑色凝灰岩		T22
77	包含層	打製石斧	109	60	19	140	流紋岩	完形	T55
78	包含層	打製石斧	56	61	20	90	流紋岩		T17
79	包含層	打製石斧	99	52.5	15	60	火山礫凝灰岩	完形	T50
80	自然河道	打製石斧	150	100	21	255	火山礫凝灰岩		N6
81	SI 1	敲石	107	82	45	545	凝灰岩		T10
82	SI 1	磨石類	105	94	29	424	凝灰岩	完形	T11
83	SI 1	磨石類	120	84	72	930	石英	完形	T7
84	自然河道	磨石類	100	28	27	95	安山岩		N4
85	SI 1	砥石	57	49	50	20	軽石		T12
86	SI 3	砥石	167	132	60	2130	砂岩		O3
87	包含層	砥石	105	112	64	450	砂岩		T33
88	SI 1	砥石	130	50	24	115	凝灰岩		N18
89	自然河道	砥石	75	65	26	185	砂岩		N3
90	SI 1	砥石	56.5	43	36	15	軽石		T8
91	SI 3	砥石	27	25	19	1.4	軽石		O6
92	SD 18	石鏃	39	215	5	2.6	黒色頁岩	完形	T56
93	包含層	石鏃	20	13	3	0.3	黒色頁岩		O14
94	SI 1	管玉未製品	19	25.5	12	4.3	緑色凝灰岩	B 2 形割	T15
95	SI 1	管玉未製品	24	19	16	4.6	緑色凝灰岩	A 2 形割	T14
96	SI 1	管玉	6	2	2	50	緑色凝灰岩	B 1 研磨	T13
97	SI 1	管玉未製品	10	7	2	100	緑色凝灰岩	A 2 形割	T13
98	SI 2	勾玉	22	8	6	3.5	翡翠		M



第7次 SD 2・8 周辺遠景（北から）



第7次 SA 7・8 SD 15・17 周辺遠景（西から）



第7次 SD 17・18 周辺遠景（西から）



第4次 SI 1 周辺遠景（南西から）



SI1 (東から)



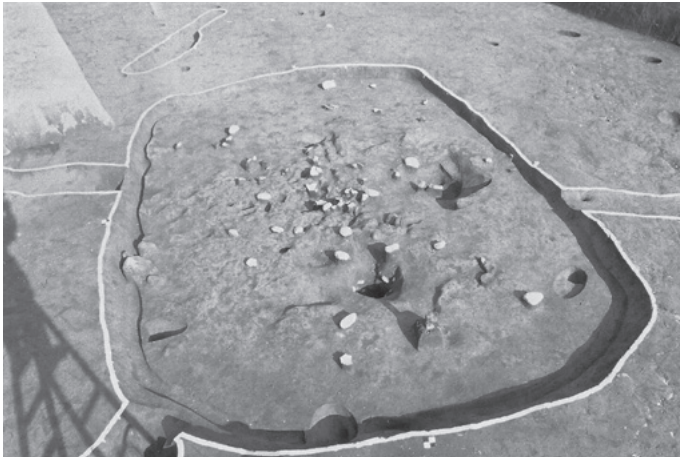
SI1 遺物出土状況 (南東から)



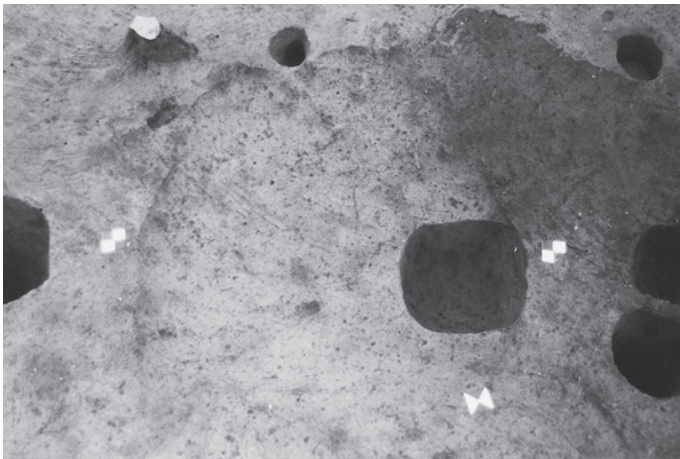
SI1 遺物 17 出土状況 (南東から)



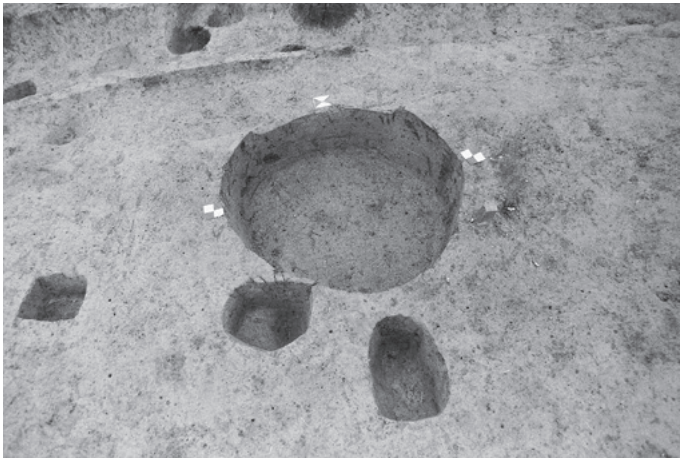
SI2 (南から)



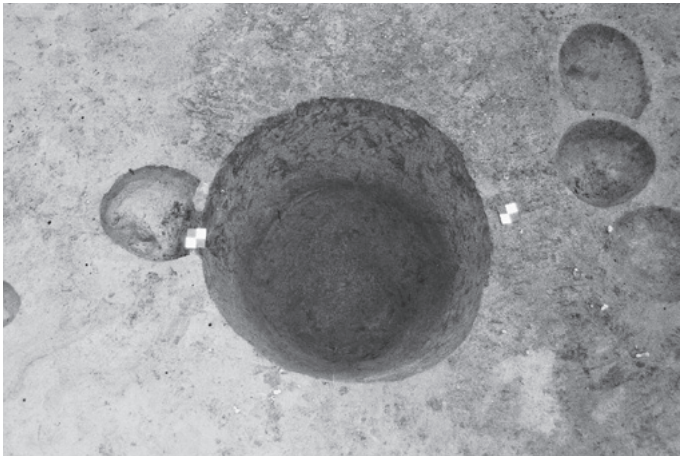
SI 3 (西から)



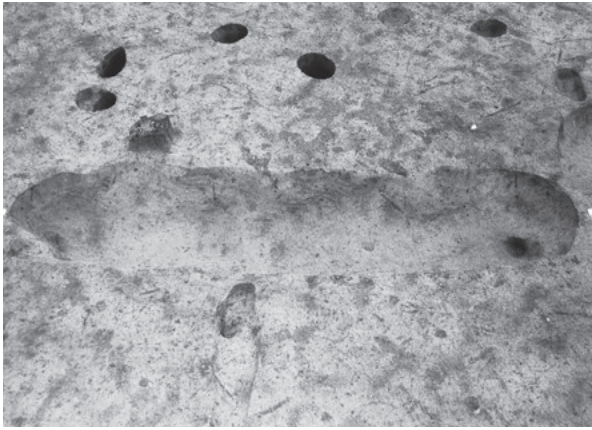
SI 4 (南から)



SK 2 (西から)



SK 8 (西から)



SK 10 (東から)



SD 1~3 (東から)



SX 1 (東から)



SD 4・5 (南から)



SA 2・3・5 (南から)



SD 4・7 (南から)



SA 8 (東から)



SA 1、SD 4・7 (西から)



SD 4・9・12 (南から)



SD 9・15 (東から)



SD 6・7 (南から)



SD 11 (東から)



SD 6 自然河道 (南から)



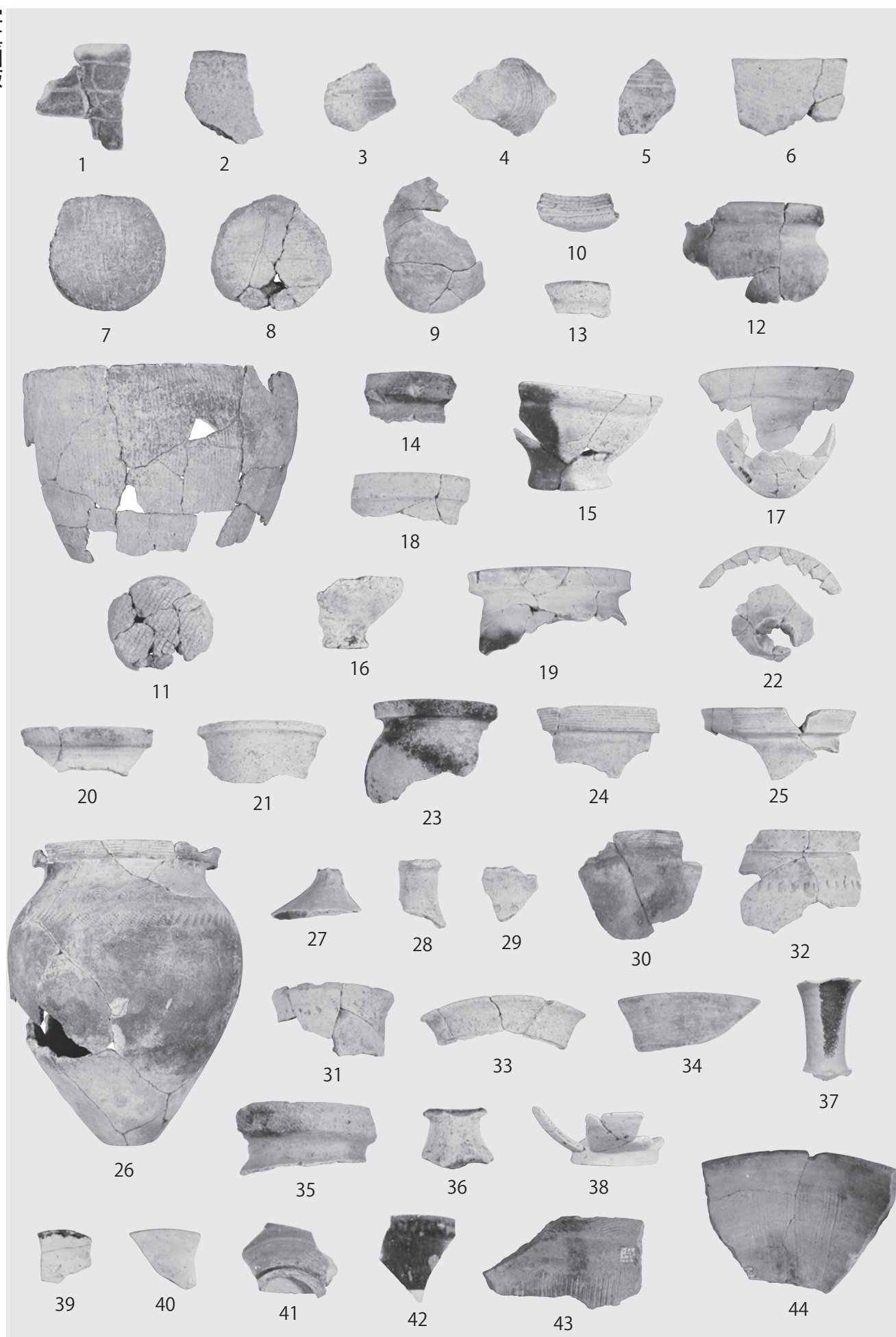
SD 15 (西から)

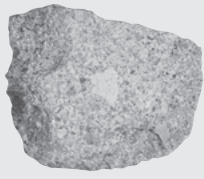


SD 9・14・16 (北から)



遺物 54 出土状況





45



46



47



48



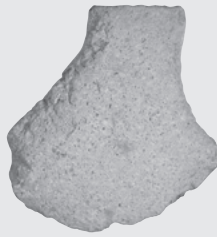
49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69





70



71



72



73



74



75



76



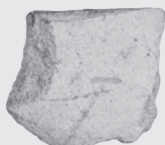
77



79



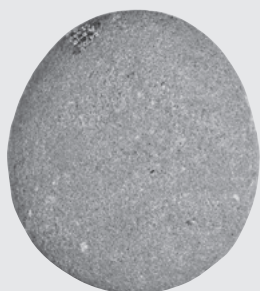
80



78



81



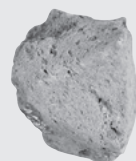
82



83



84



85



90



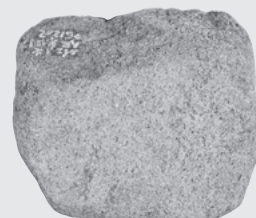
86



87



88



89



91



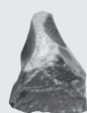
92



93



94



95



96



97



98

## 報告書抄録

ふりがな	ふつかいちいしばちいせき							
書名	二日市イシバチ遺跡4							
副書名								
シリーズ名	北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	田村昌宏							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 TEL076-227-6122							
発行年月日	西暦 2015年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〇"	東経 〇'〇"	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 2次調査	いしかわけん 石川県 ののいちし 野々市市 ふつかいちまち 二日市町	17344	121700	36° 32' 21"	136° 35' 45"	20061012 ～ 20061226	1,562	記録保存 調査
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 3次調査	いしかわけん 石川県 ののいちし 野々市市 ふつかいちまち 二日市町	17344	121700	36° 32' 22"	136° 35' 44"	20061012 ～ 20061226	760	記録保存 調査
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 4次調査	いしかわけん 石川県 ののいちし 野々市市 ふつかいちまち 二日市町	17344	121700	36° 32' 20"	136° 35' 42"	20070927 ～ 20071024	906	記録保存 調査
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 7次調査	いしかわけん 石川県 ののいちし 野々市市 ふつかいちまち 二日市町	17344	121700	36° 32' 19"	136° 35' 43"	20100416 ～ 20101228	2,853	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 2次調査	集落	弥生 中世	竪穴建物、掘立柱建物、 柵列、溝		弥生土器、中世陶磁器、石鋏			
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 3次調査	集落	弥生 中世	竪穴建物、掘立柱建物、 柵列、溝		弥生土器、中世陶磁器、石鋏			
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 4次調査	集落	弥生 中世	竪穴建物、溝		弥生土器			
ふつかいち 二日市イシバチ 遺跡 7次調査	集落	弥生 中世	竪穴建物、竪穴状遺構、 掘立柱建物、土坑、柵列、 溝		弥生土器、中世陶磁器、石鋏			
要約	<p>弥生時代後期後半と中世の集落跡を確認した。弥生時代の主要な遺構は、竪穴建物3棟、掘立柱建物2棟である。本調査区より西方には竪穴建物約40棟検出した集落の中心地があることから、本調査区は集落中心からやや離れた縁辺部になると想定される。</p> <p>中世においては14世紀を中心とした集落域が本調査区東端で確認できるが、その他のエリアでは、溝とピット群で構成された柵列しか見つかっていない。これらの溝と柵列は区画を呈していることから、区画内で耕作を営んだ生産域と考えられる。</p>							

2015年3月30日 発行

北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 11

## 二日市イシバチ遺跡 4

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県野々市市住吉町12-27

株式会社 画遊

